

問題1

平成27年(2015)は「家康公四百年祭」の節目の年を迎えますが、どのような年なのでしょう？

- (1) 家康公が生まれて400年(生誕400年)
- (2) 家康公が江戸城に入って400年(江戸開府400年)
- (3) 家康公が幕府を開いて400年(開幕400年)
- (4) 家康公が亡くなって400年目(400回忌)

解説

家康公は天文11年(1542)に岡崎城で生まれ、元和2年(1616)に駿府城で亡くなりました。したがって来年の2015年には400年忌を迎えることになります。家康公の生涯は、

- ・主に人質として過ごした幼少時代
- ・戦国大名としての自立を果たした岡崎在城時代
- ・戦国大名としての飛躍を遂げた浜松在城時代
- ・五カ国大名および天下人として治世に手腕を発揮した駿府在城時代

この「家康公検定」は、家康公の薨去400年の節目の年に、家康公のご遺徳を広く発信しようと、ゆかりの岡崎、浜松、静岡の3市3商工会議所等が実施する徳川家康公顕彰四百年記念事業の一環として行われています。



岡崎城・浜松城・駿府城の家康公像

問題2

天下統一への道を開いたのは、織田信長。しかし道半ばで本能寺に倒れました。このとき、信長49歳。歴史が動いたこの時、家康公は何歳だったでしょう？

- (1) 21歳
- (2) 31歳
- (3) 41歳
- (4) 51歳

解説

織田信長は天文3年(1534)に尾張国那古野城(近年は勝幡城生誕説あり)に生まれました。家康公より8年早く生まれたこととなります。家康公は6歳から8歳まで尾張で人質として過ごしますが、その間に信長が大変可愛がったとされる伝承は確証のあるものではありません。ただ、信長27歳、家康公19歳の時にそれぞれの大きな転機となった「桶狭間の合戦」があり、翌年の永禄4年(1561)には軍事的な同盟である「清洲同盟」を結び、以来、信長が本能寺で無念の最期を遂げるまでの21年間、二人の関係が揺るぐことなく続いたことから、そんな伝承が生まれたのでしょうか。信長の果たせなかった天下統一の事業を引き継いでいくことになるのです。



織田信長像(清洲城址/清須市)

問題3

家康公の偉業への先駆者^{せんくしや}は、豊臣秀吉。しかし天下を統一するも、まだ社会^{とどの}が整う前に病に倒れました。秀吉62歳。このとき、家康公は何歳だったのでしょうか？

- (1) 37歳 (2) 47歳
(3) 57歳 (4) 67歳

解説

豊臣秀吉は一般的には天文6年(1537)、尾張国中村の生まれと伝えられていますが、天文5年出生説もあり事実は定かではありません。信長の家臣として活躍しているころから家康公との関わりがあったと考えられますが、『家忠日記』では本能寺の変後にその名が初めて登場してきます。信長亡き後を引き継いだ秀吉にとって、その盟友であった家康公の存在^{きやうい}は脅威となり、小牧・長久手の合戦を引き起こしました。その後、家康公が臣下の礼を取ったこともあり、信長の果たせなかった天下の統一を成し遂げます。家康公は五大老の筆頭として政務の担当に当たり、秀吉亡き後も天下の平定に向けてその志を受け継いだのです。



豊臣秀吉像
(大阪城豊国神社／大阪市)

解答… (3)

問題4

戦国の世の三河にあって、家康公の偉業の源にあるのは両親。英断をもって岡崎城の松平八代 広忠のもとに娘 於大^{おだい}を嫁がせた水野忠政の居城はどこでしょうか？

- (1) 犬山城 (2) 刈谷城^{かりや}
(3) 名古屋城 (4) 吉田城

解説

家康公の母である於大は、刈谷城(刈谷市)から岡崎城に14歳の時に嫁ぎました。父は城主の水野忠政^{けいよう}です。母はお富(源応尼・華陽院)といいましたが、政略によって於大が幼い頃^{いん}に岡崎城主の松平清康(家康公の祖父)の元へ再嫁しました。しかし、その清康が暗殺され、幼かった松平広忠が後を継いでから岡崎は衰退して行きます。尾張の織田家が台頭して西三河の領有権を巡り動乱が続きました。そんな中で松平家と水野家は戦国の生き残りをかけ、この結婚でもう一度手を結ぼうと考えたのです。



刈谷城模型(刈谷市役所)

解答… (2)

問題5

於大が嫁いだ松平広忠は、ある有力大名の庇護(助け)を受けて松平家の当主になることができました。この有力大名とはだれでしょうか？

- (1) 今川義元 (2) 織田信秀
(3) 武田信玄 (4) 水野忠政

解説

父・清康を亡くした松平広忠は10歳で松平家を継ぎました。これを機と見た尾張の織田信秀(信長の父)が岡崎を攻撃してきたのです。幼い主君の元で松平家の家臣達は奮戦し、井田野の合戦で勝利を収め危機を乗り越えました。しかし、その後に松平宗家の家督を狙う松平信定(祖父・信忠の弟)の岡崎城入りによって、広忠は城を追われてしまいます。広忠は家臣の阿部定吉とともに伊勢や遠江などに逃亡した後、今川義元を頼ります。その義元の後ろ盾と岡崎城で時を待っていた大久保忠俊らの協力もあり、広忠は岡崎城に無事帰ることが出来ました。



今川義元像(臨濟寺／静岡市葵区)

解答… (1)

問題6

家康公を生涯をかけて支えた母の於大が、戦国の世を終わらせる元気な男の子を授かるよう神仏に祈願し、家康公が生まれると、寅歳の守り神「真達羅大将」が消えたと言われる場所はどこでしょうか？

- (1) 大樹寺の多宝塔 (2) 滝山寺の宝物殿
(3) 鳳来寺の薬師堂 (4) 松平東照宮

解説

家康公の母の於大は、子を授かる前に鳳来寺(新城市)に祈願に行きました。その願いにより授かった子(竹千代・後の家康公)が生まれた時、鳳来寺の本尊である薬師如来の守護神・真達羅大将の像が消えたと言われています。竹千代は真達羅大将の化身としてこの世に遣わされ、乱世から人々を救うと信じられました。後に、天下統一を果たした家康公が亡くなった時、姿を消していた真達羅大将の像は、役目を果たして無事に鳳来寺に戻ったと伝わっています(「鳳来寺由緒」)。



鳳来寺薬師堂

本尊の薬師如来を守護するのが十二神将(新城市)

解答… (3)

問題7

天文11年(1542)、三河の松平家をはら挟むする駿河の今川家と尾張の織田家が松平領内(岡崎)で衝突しました。この戦いをなんというのでしょうか？

- (1) 小豆坂合戦 (2) 姉川の合戦
(3) 井田野合戦 (4) 桶狭間の合戦

解説

尾張の織田氏と駿河の今川氏の西三河を巡る争いはかなり古くからあったようです。特に家康公の生まれた天文11年(1542)に勃発した「第一次小豆坂合戦」は、安城城を奪取した織田信秀(信長の父)による岡崎への侵入がその原因でした。当時、岡崎城主であった家康公の父・松平広忠は今川義元の庇護下ひごにあり、義元は救援要請を受けて出陣したのです。両軍は岡崎市の小豆坂で激突し、当初は織田方が優勢でしたが、松平太郎左衛門家(豊田市松平郷)の信吉・勝吉らの奮戦もあり痛み分けに終わったというのが実情でしょう。いずれにしろ、織田氏の進出による危機的な状況の中で家康公は誕生したのです。



小豆坂合戦戦没者慰霊祭(小豆坂古戦場/岡崎市)

問題8

天文11年(1542)、前問の合戦の後、松平家が待ち望んだ男の子、後の家康公が誕生しました。誕生日はいつでしょうか？

- (1) 2月12日 (2) 4月17日
(3) 8月1日 (4) 12月26日

解説

天文11年(1542)12月26日の寅の刻(午前4時ころ)、三河国・岡崎城内坂谷の屋敷で家康公は誕生しました。父は松平家八代目の広忠、母は刈谷の水野家から嫁いだ於大です。家康公の幼い頃の名は、竹千代と名付けられました。家康公の生まれた頃、国力が衰えていた松平家は、東の今川氏と西の織田氏の大きな勢力の間に挟まれて苦悩していました。そんな中、松平家の当主の子として生まれた竹千代へ、家臣達の期待と喜びはとても大きかったです。現在、岡崎市ではこの家康公生誕の日をお祝いする様々な行事が行われています。



家康公生誕祭の提灯行列神事(六所神社/岡崎市)

問題9

天文16年(1547)、6歳になった竹千代(家康公)は、今川義元のもとへ人質として送られる途中、戸田康光によって尾張の織田氏に送られてしまいました。そのおかげで信長との縁ができましたが、この戸田氏はどこの城主だったのでしょうか？

- (1) 犬山城 (2) 大垣城
(3) 掛川城 (4) 田原城

解説

戸田氏は松平三代・信光が岡崎北部に進出した時代には、すでに上野城(豊田市上郷町)に存在していたことが史料に残されています。その後は東三河に進出し、二連木城や田原城を支配しながら勢力を拡大しました。尾張の織田氏と駿河の今川氏による西三河の支配権争いが激しくなると、今川方に属していた戸田氏も独自の動きを探るようになり、田原城主・戸田康光による竹千代拉致事件はそんな状況の中で起きました。康光は今川義元によって滅ぼされてしまいます。しかし、二連木の戸田氏はそのまま命脈を保ち、後には家康公に仕えて譜代大名となっていきました。



田原城址(田原市)

解答… (4)

問題10

天文18年(1549)、今川義元は織田方の安城城を攻めて城代の織田信広を捕らえ、人質交換により竹千代を駿河に迎えます。この時、織田軍に勝利して人質交換を成功させた今川軍の総大将であり、軍師とはだれでしょうか？

- (1) 黒田官兵衛 (2) 太原雪斎
(3) 竹中半兵衛 (4) 山本勘助

解説

家康公の父・広忠が死去したのは、諸説がありますが、一般的に天文18年(1549)とされています。家康公が8歳の時で尾張に人質として囚われている時でした。駿河の今川義元は軍師であった太原雪斎を自分の名代として岡崎に派遣し、西三河での支配権を拡大する織田氏を排除しようとします。そのためにまず安城城の織田信広を攻め、信広を捕縛して竹千代との人質交換に成功しました。竹千代は義元のもとに送られ、主不在の岡崎城は、今川氏の重臣が輪番で城代を務めるようになります。岡崎は今川氏の領国となっていたのです。



太原雪斎像(臨濟寺/静岡市葵区)

解答… (2)

問題11

駿府すんぷでの人質時代、母に代わって幼い竹千代を養育し、心の支えになった祖母はだれでしょうか？

- (1) 於江おごう(崇源院すうげん) (2) 於久おひさ(隨念院ずいねん)
 (3) 源応尼げんおう(華陽院けよう) (4) 寿桂尼じゆけい

解説

3歳で母の於大と別れていた竹千代に、祖母の源応尼すい(華陽院)が人質先の駿府すいに随すい行して養育をしました。岡崎から駿府に行く途中、岡崎市井田町の泉龍寺で竹千代と松平家の命運を祈ったと伝わっています。竹千代は駿府の智源院で住職の知短から読み書きを学びますが、源応尼の存在は母のいない幼い竹千代の大きな支えになっていました。源応尼は永禄3年(1560)、元服も終えて成長した元康(家康公)を見届けて駿府で亡くなりました。後に天下人となった家康公は源応尼の戒名を「華陽院」とし、共に過ごした智源院は寺名を華陽院と改めました。



華陽院の墓

傍らに家康公御手植えのみかんの木がある(華陽院/静岡市葵区)

問題12

人質の竹千代に高等教育ほとこを施し、家康公の学問の師ともいえる駿府臨濟寺りんざいじの名僧とはだれでしょうか？

- (1) 安国寺恵瓊あんこくじ えけい (2) 勢誉愚底せいよ ぐてい
 (3) 太原雪斎 (4) 南光坊天海てんかい

解説

太原雪斎は今川義元の軍師というよりも、むしろ政治・外交・学問の師としての側面を持った人物でした。明応5年(1496)に生まれたとされる雪斎は若い頃より義元の傍に仕えるようになりますが、一方で京都の建仁寺や妙心寺で僧としての学問や修行に努め、駿府臨濟寺の高僧として義元にも高度な教育を施したと伝えられます。今川家の家督争いの際は義元の相続に尽力、今川家の全盛期を築きあげました。雪斎は義元の依頼で人質であった竹千代にも高等教育を施したとされ(『朝野旧聞ちやうや きゅうぶん 藁ほう』)、その「手習いの間」が臨濟寺に残されています。



竹千代手習いの間(復元/駿府城巽櫓資料館)

問題13

駿府での人質時代、随行していた鳥居元忠は、竹千代から「百舌鳥を鷹のように躡けよ」と命令されましたが、できなかったため怒った竹千代に縁側から蹴り落とされました。岡崎でその話を聞いた元忠の父親の鳥居忠吉は何と言ったと伝わるでしょうか？

- (1) 「これでは家臣団がついていけない」と松平家の将来を嘆いた。
- (2) 「主君が正しくない行動をしたときは諫言せよ」と元忠に注意した。
- (3) 「こんな主君に仕える価値はない」と元忠に岡崎に帰るように伝えた。
- (4) 「それこそ、この乱世を勝ち抜く大将の器」と竹千代を褒めた。

解説

戦国時代、上級武士のスポーツとして鷹狩が流行していました。幼い竹千代は大人を真似て百舌鳥を鷹のように育てようと試み、3歳年上の鳥居元忠に命じましたが上手くいきませんでした。怒った竹千代は元忠を縁側から蹴り落としたのです。それを見ていた他の家臣たちは竹千代を諷刺しましたが、元忠の父・忠吉はそれを聞いて怒るところか「大将の器」と褒めたのです。後日、元忠を呼び、我慢したことを褒めながら、生涯、忠義を尽くすように話したと伝わります。



鷹の図(伊賀八幡宮／岡崎市)

問題14

元服をして元信と名乗った家康公が、父祖の墓参りのために岡崎に一時帰国した際、厳しい今川支配の中、将来の家康公の出陣のために蓄えた武器や米穀、銭などを見せ、家康公を感激させたという譜代の家臣はだれでしょうか？

- (1) 石川家成
- (2) 大久保忠俊
- (3) 鳥居忠吉
- (4) 本多重次

解説

主不在の岡崎城で阿部定吉らと共に奉行衆として勤め、岡崎の領民、家臣たちを守っていたのが鳥居元忠の父・忠吉です。奉行たちは今川重臣の指揮下に置かれ、主に租税の徴収や訴訟の処理などに当たっていました。鳥居氏は矢作川沿いの岡崎市渡町に居を構えていましたが、渡場の管理をしていたと伝わり、財を蓄えることができたのでしょう。竹千代が元服をして岡崎への一時帰参をした際のこの逸話は、鳥居氏の忠義心を称えるものとして有名です。長男の忠宗は渡の合戦で討死にし、二男は出家していましたので、三男の元忠が家督を継ぎました。



鳥居氏発祥の地碑(岡崎市渡町)

問題15

弘治3年(1557)、家康公は今川義元めいの姪にあたる瀬名姫せなひめ(後の築山殿つきやまどの)と結婚します。彼女の父親で、今川家の重臣りであり、家康公の元服の際には、理髪はつ(子供の髪型を大人の髪型に整える)の役を務めたと伝わる武将はだれでしょうか？

- (1) 朝比奈泰朝あさひなやすとも (2) 井伊直盛なおもり
 (3) 鵜殿長照うどのながてる (4) 関口義広せきぐちよしひろ

解説

関口氏はもともと今川一族であり、静岡の瀬名地区に所領を有していたことから「瀬名今川氏」と呼ばれていました。関口義広は義元の重臣として、竹千代元服の折には「理髪」の役を行っています。このようなことから、竹千代は単なる人質として扱われていたのではなく、義元を支える今川家の部将としての待遇を得ていたことが理解できるでしょう。元服をした元信は、この関口義広の娘を正室として迎えることになり、今川一族に組み込まれていくことになりました。しかし、後に改名した元康が織田信長と同盟を結んだ際、義広うじざねは今川氏真からその責を問われ切腹をさせられてしまいます。



瀬名今川氏の菩提寺光鏡院(静岡市葵区)

問題16

永禄元年(1558)、17歳となった家康公は元康もとやすと改名し、義元の命令ういじんで初陣を果たします。このときに攻めたのはどこだったのでしょうか？

- (1) 岩崎城(日進市)にわの丹羽氏
 (2) 牛久保城(豊川市)の牧野氏
 (3) 小田原城(小田原市)の北条氏
 (4) 寺部城(豊田市)の鈴木氏

解説

寺部城主の鈴木重辰が今川氏そむに背き織田氏に通じたため、今川義元が初陣の元康(家康公)に鈴木氏の攻撃を命じました。元康は故郷の岡崎城に帰り、自ら先頭に立って松平の諸将たちを率いて激戦の末、寺部城を落とし見事に初陣を飾ります。祖父・清康をほうふつとさせる家康公の勇ましい姿に、岡崎の将士達は皆感動し喜びました。しかし、それでも岡崎城主として戻されることはなく、2年後、桶狭間の合戦を迎えることになります。

寺部城址
江戸時代は渡辺氏の陣屋であった(豊田市)

問題17

永禄3年(1560)、家康公は今川軍の先鋒として大高城への兵糧入れを行いましたせんぽうが、これが初陣ひょうろうとなった家臣で、以後、関ヶ原の合戦に至るまで、武をもって家康公を支え続けた武将はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

本多忠勝は安城・松平家(徳川宗家)最古参の譜代家臣・本多忠高の長男として天文17年(1548年)、三河国・額田郡蔵前(愛知県岡崎市西蔵前町)に生まれました。天文18年(1549年)には、父・忠高が第三次安城合戦で戦死し、叔父・忠真のもとで育てられます。忠勝はこの初陣と同時に元服しました。また、初首は15歳の時で、今川氏真の部将である小原鎮実との長沢の戦いの時、叔父の忠真が倒した敵将の首を忠勝に与えて武功を飾らせようとしたのですが、忠勝は「我何ぞ人の力を借りて、以て武功を立てんや」と言い、自ら敵陣に駆け入り敵の首を挙げました。忠真をはじめとする諸将は、忠勝を只者ではないと感じ入ったと伝わります。



本多忠勝像(岡崎公園/岡崎市)

問題18

桶狭間の合戦で今川義元が織田勢に討ち取られると、大高城で孤立した家康公に家臣を送り、岡崎への脱出の道案内をさせて窮地から救った武将はだれでしょうか？

- (1) 岡部元信 (2) 武田信玄
(3) 久松俊勝 (4) 水野信元

解説

水野信元は於大の方の異母兄であり、家康公にとっては伯父にあたる人物です。大高城で孤立した家康公の窮地を救った後、信元は信長と家康公との間に入り清州同盟の仲介役として大きな役割を果たしました。また、信元は家康公が三河を平定したのちも様々な場面で相談に乗るなど、強い影響力があったようです。その後、天正3年(1576年)に、武田方に内通しているとの疑惑をもたれ、信長の命によって殺害されてしまいました。



水野信元の菩提寺楞嚴寺(刈谷市)

問題19

大高城から岡崎の大樹寺まで退却した家康公でしたが、織田方の兵に迫られ先祖の墓の前で切腹の覚悟をします。そのとき、ある人物が家康公にある言葉を贈り、生きる意義を与えました。この、ある人物とはだれでしょうか？

- (1) 快川和尚 (2) 太原雪斎
(3) 登誉上人 (4) 松平清康

解説

桶狭間の合戦当時、岡崎城には今川方の兵が駐屯していたため、無用のトラブルを避けるために、いったん岡崎の大樹寺に入ったと伝わっています。その際、引き連れていたのは近臣18名だったといえます。大樹寺は文明7年(1475年)、松平四代・親忠が創建した浄土宗の寺で、家康公が逃げ帰った当時の住職が登誉上人でした。松平家歴代の菩提所及び祈願所であり、多くの塔頭(修行僧の居住寺)が建ち並び、修行僧も多かった大樹寺は、家康公にとって大きな心のよりどころだったのでしょ。



登誉上人像(大樹寺/岡崎市)

問題20

前問で、家康公が与えられた言葉で、以後、旗印として戦場で掲げられた言葉とは何でしょうか？

- (1) 厭離穢土 欣求浄土 (2) 常在戦場
(3) 南無阿弥陀仏 (4) 八幡大菩薩

解説

織田方の雑兵に囲まれ、先祖の墓前で切腹の覚悟をした家康公でしたが、住職の登誉上人は「厭離穢土 欣求浄土」という言葉の意味を諭し、家康公に生きる意義を与えました。その言葉の意味とは、穢れた乱世(穢土)を厭い離れ(厭離)、平和な世(浄土)を願い求める(欣求)という仏の教えです。家康公は上人のこの話に感動し、自らの使命の自覚と生きる希望を見出しました。以後、戦場には常にこの言葉を旗印として掲げ、平和な社会を求めて戦い続けていったのです。



姉川合戦屏風(部分/福井県立歴史博物館蔵)

問題21

この大樹寺門前の戦いで、門の門(貫木)を武器にして奮闘し、織田方の兵を退散させたと伝わる怪力僧とはだれでしょうか？

- (1) 金地院崇伝 (2) 祖洞和尚
(3) 沢庵和尚 (4) 登誉上人

解説

祖洞和尚は大樹寺にいた僧侶で、70人力で門を振り回したといわれています。その後、三方ヶ原の合戦の2年後、犀ヶ崖では戦死した武田軍の祟りと思われる出来事が続いたため、家康公は岡崎の大樹寺から僧侶を呼んで、七日七晩念仏を唱えさせ供養しました。その僧侶は貞誉了傳といい、その人物こそ、祖洞和尚だといわれています。のちに、貞誉了傳は徳川幕府の庇護のもとに、西福寺(静岡市)の開山となり、二代将軍・秀忠の時に、江戸の蔵前に松平西福寺を建立、その開山となるなど、家康公に受けた恩を決して忘れることはありませんでした。



祖洞和尚像(大樹寺/岡崎市)

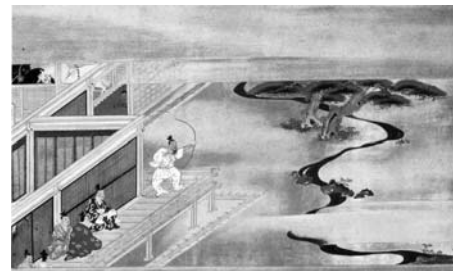
問題22

岡崎城に入り、翌年の永禄4年(1561)、三河の西条城(後の西尾城)を攻略した家康公は、功のあった部将にこの城を与え城主としました。家康公の家臣で最初に城主となったのはだれだったのでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井正親
(3) 酒井忠次 (4) 鳥居忠吉

解説

酒井正親は清康、広忠、家康公と三代にわたって仕えた重臣です。後の徳川四天王に数えられる酒井忠次とは別の系統ですが、家康公生誕の時には、「胞刀(護刀)の役」を行うなど正に筆頭の家臣でした。桶狭間の合戦後、西三河の平定を目指す家康公は、まず手始めに正親に西尾城(当時は西条城)の牧野氏を攻略させます。牧野氏は城を捨て逃亡したので、その後に正親を城主として置きました。家康公が天下を平定した後、この酒井家は前橋から姫路藩主となります。

東照社縁起絵巻巻一
(複製部分抜粋/三河武士の館家康館)

問題23

永禄5年(1562)、家康公はある武将と軍事同盟(清洲同盟)を結び、本格的に三河平定に乗り出しました。この同盟の相手はだれだったでしょうか？

- (1) 今川氏真 (2) 上杉謙信
(3) 織田信長 (4) 武田信玄

解説

「武徳編年集成」には、信長が「互いに天下を目指し、どちらかが天下に号令をかけるときには、互いが家臣になろう」と話したと記されています。清洲同盟はこれ以後、信長が本能寺で死去するまで、戦国時代としては異例の21年もの間、維持され続けました。家康公は、信長が苦境に陥ったときでも同盟関係を貫きました。その律儀な姿勢が内外における信用を高めて、後年の天下平定につながったとも言われています。



清洲城模擬天守閣(清須市)

解答… (3)

問題24

永禄5年(1562)、家康公は上ノ郷城(蒲郡市)を攻め、城主の鵜殿氏の二人の子を生け捕りました。この戦いで手柄を立てて、家康公から上ノ郷城を与えられ城主となった武将はだれでしょうか？

- (1) 酒井忠次 (2) 久松俊勝
(3) 本多忠勝 (4) 松平家忠

解説

久松俊勝は家康公の母である於大の方の再婚相手としてよく知られています。元々は知多の坂部城(阿久比城)の城主でしたが、清洲同盟の際に、信長より家康公の与力として付属させられたと伝えられます。俊勝は於大の方と5人の子(康元、康俊、定勝、多劫姫、松姫)を伴い岡崎に移り住みました。特に於大の子である康元、康俊、定勝には義兄弟でもあることから松平姓を与え、後に久松松平家を興します。西郡の鵜殿氏を攻めた後には上ノ郷城を与えられますが、長男の康元に譲り自身は岡崎に住んだようです。於大が少しでも家康公の近くに居られるようにとの配慮だったのでしょう。



久松俊勝墓(安楽寺／蒲郡市)

解答… (2)

問題25

前問にて捕らえた鶴殿氏の子らと、駿府に残された家康公の妻子との人質交換のため今川氏真のもとへ出向き、見事に成功させたのはだれでしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 植村家政
 (3) 大久保忠佐 (4) 本多正信

解説

石川数正は家康公が今川義元の人質になっていた時代から近侍として仕えていました。永禄4年(1561年)の織田氏との和睦交渉では国境の策定を行ない、翌年の清洲同盟成立に大きく貢献しました。そんな中で吉田城に囚われていた今川方への人質が処刑されると、今川氏真と交渉して人質同様に駿府に留め置かれていた家康の嫡男・信康と正室・築山殿、長女・亀姫を命がけで取り戻しました。

「三河物語」には人々の喝さいを浴びながら信康を首馬に乗せ(自分の前に乗せ)、自慢げに岡崎城に帰還する様子が記されています。



石川数正夫妻の墓(正行寺／松本市)

問題26

永禄6年(1563)三河一向一揆がおこったとき、一族が団結して家康公の味方をし、上和田砦など最前線で活躍した譜代の家はどこでしょうか？

- (1) 大久保家 (2) 内藤家
 (3) 夏目家 (4) 渡辺家

解説

三河一向一揆で家康公をもっとも悩ませたことは、本多家、石川家など譜代の一族が二分して争ったということです。そのような状況の中で、大久保家は一族の宗派が法華宗であったということもあり、分裂することなく家康公に貢献したのです。特に大久保忠世は、この時の負傷で片目の視力を失ったとも伝えられています。和睦交渉の際には、一揆方の代表でもある蜂屋貞次が大久保家と縁戚関係にあったことなどもあり、長老の大久保忠俊がその助命を進言しました。その様子が「三河物語」に詳しく記されています。



大久保一族発跡地の碑(岡崎市上和田町)

問題27

三河一向一揆では一向宗信徒として家康公に敵対し、その後、各地を流浪しましたが、帰参後は家康公の右腕として政治手腕を發揮し、家康公が亡くなるまで腹心の家臣(深く信頼する家臣)として支えたのはだれでしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 大久保忠教
(3) 土井利勝 (4) 本多正信

解説

本多正信は三河一向一揆で家康公に敵対し、一揆が鎮圧されると松平家を飛び出し、大和国の松永久秀に仕えたと伝えられます。しかし、その後は諸国を流浪したとも、加賀の一向一揆に加わったとも言われ、何をしていたのかは定かではありません。やがて大久保忠世を通じて家康公への帰参を許されました。後に家康公の右腕として活躍するようになりますが、特に関東移封後は関東奉行として辣腕を振り、古参の家臣たちが江戸から遠くの地に配置されたこともあって、徳川家内での権限を増していきます。嫡子の正純は自分の代わりに家康公の側近として駿府で大御所政治を支えました。



上野城址

正信が一揆方として籠った城。榊原康政生誕の城としても有名である(豊田市)

問題28

一向一揆の終結後、家康公は東三河の平定に乗り出します。今川方の拠点となっていた吉田城(豊橋市)攻略後、田原城攻めの中心となって活躍し、後に田原城主となったのはだれでしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 酒井忠次
(3) 平岩親吉 (4) 本多広孝

解説

本多広孝は家康公が岡崎城に戻ってきた後、所領回復の戦いに忠節を尽くしました。特に東条吉良氏との戦いでは、劣勢に追い込まれた松平軍を支えて奮戦、吉良氏の家老で勇将であった富永忠元を討ち取ります。三河一向一揆では息子の康重を忠節の証として家康公に差し出し、再び反旗を翻した吉良氏の東条城を攻めました。家康公の東三河進出に従い、田原に砦を構築して今川勢のこもっていた田原城を攻め、陥落させた恩賞として田原城を与えられました。その子孫は多くの支流を持つ本多家の中でも「彦次郎系」と呼ばれ、子の康重は初代岡崎藩主となりました。



本多広孝が本陣を置いた西光寺(田原市)

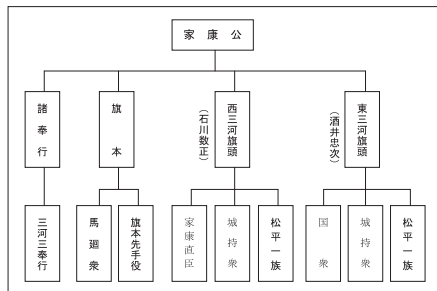
問題29

家康公の三河統一期の家臣団体制に「三備の制」があります。旗頭として西三河の松平一族や城持衆などを従えた武将はだれでしょうか？

- (1) 阿部忠吉 (2) 石川数正
(3) 酒井忠次 (4) 本多忠勝

解説

もともと西三河の旗頭であった叔父の家成が、遠州東部の要である掛川城に転出すると、数正が代わって西三河の旗頭となりました。旗頭というのは家臣や国人衆、また松平一門衆までその配下に置く立場であり、家康公の右腕となる存在でもありました。三河統一期に定めた「三備の制」という軍制の中核をなすもので、東三河の旗頭には吉田城主でもあった酒井忠次がその任に当たっています。また家康公直属の機動力を持つ騎馬隊として「旗本先手役」を置き、本多忠勝や榊原康政、大久保忠世、鳥居元忠らがその任に就いています。家康公を中心とした強固な軍団ができ上がっていったのです。



三備の制組織図

問題30

主に領国の民政を担当した「三河三奉行」。「仏()、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と謳われましたが、()に入る名字は何でしょうか？

- (1) 植村 (2) 高力
(3) 服部 (4) 渡辺

解説

「三備の制」は明らかに軍制でしたが、その中で唯一民政部門として「三河三奉行」を置きました。民衆からの税の徴収や訴訟などを取り扱う部門で、高力清長、本多重次、天野康景の三人の奉行衆が置かれました。問題文にあるように謳われましたが、高力清長は情けに厚く、本多重次は逆に厳しく、そして天野康景は平等であるという三人の性格の違いを表したものです。彼らが交代で仕事をすることにより、バランスのとれた民政を実現しようと考えたのでしょう。家康公の優れた人材活用の様子が見てとれます。



高力清長の墓がある正楽寺 (幸田町)

問題31

永禄11年(1568)、家康公の遠江侵攻の案内役を勤めた菅沼忠久・近藤康用・鈴木重時の3人は、その領した地名から何と呼ばれたでしょうか？

- (1) 井伊谷三人衆 (2) 武川衆
(3) 三河三奉行 (4) 山家三方衆

解説

遠州浜名湖の沿岸部を有する領主たちは、今川氏への忠誠心が比較的強かったため、家康公は遠江侵攻の障害となることを危惧していました。そこで事前に、東三河の菅沼定盈を使って懐柔工作に動きまわりました。定盈は、同族のよしみで菅沼忠久に接触し、忠久が縁戚の鈴木重時を抱き込み、近藤康用まで取り込みました。これにより家康公は、強固な浜名湖西岸部よりも防備の弱まった井伊谷から三河主力軍を進めて、曳馬城の年内陥落という早期制圧にこぎつけたのです。この3人は家康公の命を受けて、後に徳川四天王の一人である井伊直政の配下に付けられました。



近藤家の菩提寺宝林寺(浜松市北区)

問題32

元亀元年(1570)、遠州進出を果たした家康公に見いだされて徳川家の家臣となり、後に赤備えを率いて戦場で大活躍し、敵から赤鬼と恐れられた武将はだれでしょうか？

- (1) 朝比奈泰朝 (2) 井伊直政
(3) 岡部正綱 (4) 吉良義昭

解説

井伊直政は今川氏の家臣である井伊直親の長男として生まれましたが、桶狭間の合戦のあと、謀反の嫌疑を受けて今川氏真によって謀殺されてしまいます。直政も今川氏に命を狙われる日々を送っていましたが、父の親友でもあった新野左馬之助親矩に救出され、その後は養母である叔母の直虎に育てられたと伝わります(「井伊家伝記」)。天正3年(1575年)、家康公に見出され、小姓として取り立てられました。井伊の「赤備え」は家康公の命によって、武田の家臣であった山県昌景の朱色の軍装を復活、統一させたものです。



井伊直政像(彦根市)

問題33

浜松城には、家臣の名前から名づけられた曲輪くるわがあります。何曲輪まがらみでしょうか？

- (1) 天野三郎兵衛康景から名づけられた三郎曲輪
- (2) 大須賀五郎左衛門康高から名づけられた五郎左曲輪
- (3) 高力与左衛門清長から名づけられた与左曲輪
- (4) 本多作左衛門重次から名づけられた作左曲輪

解説

本多重次は重次の名より、通称の作左衛門とその勇猛果敢ゆうもう かん ごとくで剛毅な性格に由来する「鬼作左」の通称でよく知られています。三河三奉行の一人で、主に行政面において活躍しました。鬼の名をとるように、法に対して厳格な人物で他人に対しても厳しく、間違っていると思えば家康公にすら指摘するほどでした。その一方で、恩賞に対しては公平清廉で、法令に対しても仮名書きで分かりやすく書き、民衆に触れやすいように記したといわれています。三方ヶ原の合戦の際は重次により作左曲輪に大量の兵糧が備蓄されていたようですが、これも信玄が浜松城を攻めきれなかった一つの要因と言えるでしょう。



作左曲輪跡(浜松城・浜松市中区)

問題34

三方ヶ原合戦の前哨戦である一言坂ひとことざかの戦いで活躍し、「唐の頭から かしら」とともに「家康に過ぎたるもの」として称えられた武将はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世
- (2) 服部正成
- (3) 本多忠勝
- (4) 松平康忠

解説

武田軍の進行具合を偵察しようとした家康公は、天竜川の東で予想よりもはるかに早く進軍していた武田の大軍と遭遇してしまいます。人数も少ないため撤退しようとはしますが、武田軍は執拗しつように追ってきました。殿を任された本多忠勝は、少ない兵ながらも十分に役割を果たし、忠勝自身も含め、徳川軍は無事に浜松城まで撤退することができました。その時の活躍を賞し、武田の家臣より「家康に過ぎたるもの」として称えられたのです。



本多忠勝像(一言坂合戦地跡／磐田市)

問題35

元龜3年(1572)、三方ヶ原の戦いの出陣前に、勝ち目のない戦いに挑む家康公に「勝負を知らざるは大将の恥」と諫言し、敵軍にかけ入り討ち死にした、後に徳川16神将の一人に数えられる武将はだれでしょうか？

- (1) 鳥居忠広 (2) 夏目吉信
(3) 蜂屋貞次 (4) 渡辺守綱

解説

鳥居忠広は鳥居忠吉の四男で元忠の弟でもあります。三河一向一揆の際には、一揆側について家康公に刃を向けましたが、一揆終結後には許され、家康公のために一生懸命尽くしたといわれています。三方ヶ原の戦いの出陣前に諫言をし、家康公から臆病者などと罵られた忠広でしたが、軍監として果敢に前線に赴き、遭遇した武田の将・土屋元村と一騎打ちを演じました。元村の首を獲りましたが忠広自身も討ち死にしてしまったのです。忠広は岡崎市本宿町の法蔵寺に葬られ、徳川十六神将として称えられています。



徳川十六神将図
○印の武将が鳥居忠広(法蔵寺蔵/岡崎市)

解答… (1)

問題36

犀ヶ崖古戦場跡(浜松市)には、二人の三河武士の顕彰碑が建っています。その一人で、三河一向一揆では一揆側につきながら家康公に許され、三方ヶ原の合戦では家康公の兜をかぶって迫り来る武田勢に斬り込み、家康公の身代わりとなって討ち死にした武将はだれでしょうか？

- (1) 鳥居忠広 (2) 夏目吉信
(3) 蜂屋貞次 (4) 渡辺守綱

解説

夏目吉信も鳥居忠広と同じく、三河一向一揆の際に一揆側に付いた家臣の一人です。三方ヶ原の戦いで家臣たちがとめるのも聞かず、そのまま玉砕覚悟で突撃しようとする家康公に強く諫言し、無事逃がすために家康公の兜と馬を奪い取り、そのまま敵陣に突入、身代わりとなって討ち死にしました。吉信のこの行動に家康公は深く感謝しており、無頼をしていた吉信の三男・吉次に対し、大坂夏の陣のあと「こうしてられるのもお前の父のおかげだ、感謝している」と話して秀忠の家臣にしたという話が残っています。この夏目氏の子孫の一人に明治の文豪・夏目漱石がいます。



夏目吉信・施忠碑
(浜松市中区)

解答… (2)

問題37

犀ヶ崖古戦場跡に顕彰碑の建つもう一人の武将で、本多忠勝の叔父であり、三方ヶ原で家康公を無事に浜松城まで退却させるために盾となって討ち死にした忠勇の士はだれでしょうか？

- (1) 本多重次 (2) 本多忠真
(3) 本多広孝 (4) 本多正信

解説

本多忠真は本多忠勝の父である忠高の弟で、槍の名手として知られています。忠高が安城城攻めで亡くなった後、幼き忠勝を保護して読み書きから武士としての心得などを教育しました。忠勝が戦に出るようになってからは、その補佐的な役割として、数々の合戦に従軍しています。三河一向一揆では、一族の多数が一揆側に付く中、家康公の味方として岡崎城に赴いています。三方ヶ原の戦いの際は、退却の際に自ら殿を買って出て、旗指物を左右に突き刺し、「ここから後へは一步も退かぬ」といって、追走する武田軍に斬りこみ討ち死にしたのです。



本多忠真忠魂碑(浜松市中区)

問題38

浜松城に帰還した家康公は、後から帰ってくる味方の兵のため、城門を開けさせ、かがり火を炊かせましたが、このとき、櫓に登り太鼓をたたいて追手の兵をけん制したと伝わる武将はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 鳥居元忠

解説

三方ヶ原で大敗して浜松城に帰った徳川軍は、城を背にして戦う決死の覚悟でした。武田軍の追手が迫ると、あえて城門を開け放して篝火を大きく焚き、敵を誘い込むような形をとりました。家康公の重臣である酒井忠次は、味方の士気を高めるために、自らバチを取って太鼓を豪快に打ち鳴らします。武田軍はそんな城の状況を見て奇妙に感じ、城を攻めることをあきらめたと伝えられます。江戸時代に創作された戯曲「酒井の太鼓」の一節ですが、その時の太鼓が磐田市の旧見付小学校に市の文化財として残されています。



伝酒井の太鼓(旧見付小学校／磐田市)

問題39

三方ヶ原の合戦で敗れた夜、犀ヶ崖で武田の兵に鉄砲で夜襲をかけ、一矢を報いた武将はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 鳥居元忠

解説

家康公の旗本・大久保忠世は、敗戦後にまだ力の残っている兵を集めると、戦いに勝利してなお浜松城に迫る武田軍に夜襲を仕掛けました。忠世は、犀ヶ崖と呼ばれる崖に布の橋を仕掛けると、背後から鉄砲を撃ちかけて敵を大混乱に陥れ、布の橋に殺到した武田の兵や馬を深い崖下に追い落としました。その結果、武田兵に多くの犠牲者がでました。三方ヶ原の戦いでは大敗しましたが、一矢報いた形となり、徳川軍の骨の強さを知らしめることになりました。



現在も残る、武田兵をだました「布橋」の地名(浜松市中区)

解答… (1)

問題40

武田信玄の跡を継いだ勝頼は、三河・遠江への再度の進出を試みます。勝頼が拠点としようとした長篠城(新城市)を守っていた徳川方の武将はだれでしょうか？

- (1) 奥平信昌 (2) 西郷家員
(3) 菅沼定盈 (4) 牧野成定

解説

長篠城はもともと菅沼氏の城で武田氏に属していましたが、武田信玄の死を受けて、元龜4年(1573)に家康公が奪取しました。その時に武田氏に与する、作手(新城市)の奥平貞能・貞昌父子を味方につけ、貞昌に長篠城を守らせたのです。裏切りに怒った武田勝頼が奥平氏の人質を処刑、その後、天正3年(1575)に大軍を率いて長篠城を囲みました。長篠の合戦はこのようにして始まりましたが、城主の貞昌はわずか五百ほどの兵で武田の攻撃から城を守りきり、後に織田信長に激賞されて信昌と改名したのです。また家康公も長女の亀姫を貞昌に嫁がせました。



奥平信昌像
(建仁寺久昌院蔵/京都市東山区)

解答… (1)

問題41

天正3年(1575)、武田勝頼の大軍^{ほうい}に包囲された長篠城を決死の覚悟で抜け出し、岡崎城^{えんけん}まで援軍の要請に向かった鳥居強右衛門勝商^{すねえもんかつあき}は、忠勇の士として多くの人々に感銘^{かんめい}を与えています。

長篠城に戻る直前で捕らえられ、城に向かって「援軍は来ない」と叫べば武田家に召し抱えると言われた彼は、どのような行動をとったでしょうか？

- (1) 「援軍は来ない」と叫び、武田軍として長篠城攻めに加わった。
- (2) 「もう少しで援軍は来る」と叫び、武田軍に磔^{はりつけ}にされ処刑された。
- (3) 隙^{すき}をみて長篠城に入り、武田軍と戦って討ち死にした。
- (4) その場で、武士らしく切腹をした。

解説

鳥居強右衛門勝商^{すねえもんかつあき}は、武田軍に包囲された絶対絶命の長篠城から、岡崎の家康公の元に援軍を求めて走りました。家康公に後詰めの出兵を頼むと、強右衛門は長篠城に急ぎ帰りましたが、問題文のように武田軍に囚われ、城兵の目の前で串刺しにされたのです。強右衛門の勇氣ある行動に敵兵ながら感動した落合左平次が、強右衛門の最後の磔姿^{はりつけ}を旗指物^{はたさしもの}に描いて残しました。



アラモの碑
志賀重昂が鳥居強右衛門の活躍を記し建立した石碑(岡崎公園)

問題42

援軍に来た織田・徳川連合軍は、武田軍の守る「鳶ノ巣山砦^{とびのすやまとりて}」を奇襲^{きしゅう}し、武田軍の退路を断つことに成功しました。長篠の合戦の勝利につながったこの奇襲作戦を信長に進言、実行した徳川の武将はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

酒井家は、三河譜代の中で最も古くから松平家(徳川家)に仕えていたため、三河武士の中でも別格とされています。酒井忠次は徳川四天王として称えられていますが、家臣団の筆頭とされ、家康公と三河武士が描かれた十六神将図でも、最も家康公に近い位置に描かれています。家康公より15歳年上の忠次は、若い頃から家康公の片腕となって活躍しました。忠次の戦術眼は素晴らしく、長篠の合戦では、城を包囲した武田の大軍が守る「鳶ノ巣山砦^{とびのす}」を奇襲すれば勝てると織田信長に進言し、見事に成功。勝利への突破口を開きました。



信長より忠次に贈られた陣羽織
(致道博物館蔵・鶴岡市)

問題43

織田信長は、「武田と密通」を理由に、家康公の嫡男で将来を期待されていた信康と、妻 築山殿の処断を命じてきました。岡崎から浜松に向かう途中の佐鳴湖の湖畔で生涯を終えた正室 築山御前の廟所が近くの寺にあります。どこでしょうか？

- (1) 館山寺 (2) 西来院
(3) 宗源院 (4) 龍雲寺

解説

家康公の妻・築山殿は、今川義元の姪で、家康公の今川人質時代に結婚しました。家康公と築山殿の間には、長男・信康と長女・亀姫がいました。桶狭間の戦い後、今川家から独立を果たした家康公は織田信長と同盟を結びましたが、西三河での領有権を固めようとする嫡男・信康の将来を恐れたのか、母の築山殿と共に殺害を命じたのです。当時の徳川家には織田家に逆らえるほどの勢力がなく、築山殿は岡崎城から浜松城に向かう途中で自害（殺されたという説も）、信康は二俣城で切腹をしました。浜松市の西来院には築山殿の廟があり、地元の人々によって手厚く供養されています。



築山殿廟所
(西来院／浜松市中区)

問題44

天正7年(1579)、21歳の若い命を散らして織田と徳川の仲を保った長男 信康。亡くなった地に近く、家康公は我が子の菩提を弔うために寺を建立しました。何という寺でしょう。

- (1) 秋葉寺 (2) 清瀧寺
(3) 天竜院 (4) 蓮華寺

解説

岡崎三郎信康は家康公の最初の子で将来を期待されていました。信康は武芸に優れ、父親である家康公と共に戦場で活躍しました。特に、長篠の合戦で武田の大軍を相手に殿を見事に成功させた活躍は素晴らしく、家臣達や織田信長を驚かせたと伝わります。織田信長に信康の切腹を命じられた時、家康公は信康を逃がそうと努力しましたが、信康は二俣城で切腹をして徳川家を守るために自らの命を犠牲にしました。二俣城の近くにある清瀧寺には、信康が葬られている廟があり、当時の二俣城主・大久保忠世や追い腹を切った吉良於初の墓も共にあります。



清瀧寺信康廟(浜松市天竜区)

問題45

天正7年(1579)、信康が^{ふたまた}二俣城(浜松市)で自害した際に、切腹^{かいしやく}の介錯^{まか}を任されながら、「三代慕^{した}いあつてきた主^{あるじ}に刃^{やいば}は向けられない」と、刀を振り下ろすことができなかつたといわれる武将はだれでしょうか？

- (1) 服部正成 (2) 久松俊勝
(3) 平岩親吉 (4) 松平家忠

解説

服部(半蔵)正成の名は、伊賀同心の統領として有名ですが、先祖の代から松平家に仕える三河武士で、「鬼の半蔵」と称されて槍を得意としていました。家康公と同じ年の正成は、伊賀同心を束ねて徳川家の情報活動に尽力しながら、戦場でも活躍しました。伊賀越えの際は、現地の伊賀者を案内役として家康公の危機を救ったと伝わります。戦場の鬼として恐れられていた正成でしたが、家康公の長男・信康切腹の際に介錯^{かいしやく}を任された時、悲しみのあまり刀を振り下ろせませんでした。後にそれを知った家康公は、「半蔵ほどの剛強者でも、信康の首を打てなかつたか……」と語つたと伝わります。



服部半蔵正成像
(徳川十六神将図より/
岡崎市法蔵寺蔵)

問題46

家康公の信頼厚く、岡崎城で信康の^{もりやく}傅役を務めていた武将で、自らの首と引き換えに信康の^{たん}助命願をしたが叶^{かな}わず、悲嘆^{ひたん}にくれて自ら^{みずか}蟄居謹慎した武将はだれでしょうか？ 後に、家康公に再三^{ちつきよ}請われて復帰しています。

- (1) 板倉勝重 (2) 内藤家長
(3) 本多重次 (4) 平岩親吉

解説

平岩親吉は家康公と同じ年に生まれ、織田・今川家の人質時代も近習として家康公に仕えました。三河一向一揆の際、親吉が敵の矢に当たって首を取られそうになりましたが、そこに家康公が駆けつけて親吉を助けたと伝わります。主君が家臣を助ける事はあまり例がありません。それほど家康公は親吉の事を大切に思っていたのでしょう。主君の信頼厚い親吉は、信康の^{もりやく}傅役を任されていました。信長が信康に切腹を命じた際、信康の代わりに自害しようとしたが許されませんでした。徳川家のために生涯を全うした親吉の墓は、岡崎市妙源寺にあります。



平岩親吉像(平田院蔵/名古屋市)

問題47

信康自害の後、岡崎城代として岡崎城を守り、築山殿と信康の二人を岡崎の寺社(祐伝寺、若宮八幡宮)に手厚く供養した武将はだれでしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 植村正勝
(3) 大久保忠隣 (4) 大須賀康高

解説

石川数正は永禄5年(1562)、築山殿や幼い信康が駿府の人質として囚われていた時に、それを命がけで救い出した功臣です。後の軍制(三備の制)では西三河の旗頭となり(当初は叔父の石川家成)、岡崎城を守り続けてきました。信康の事件に関しては諸史料に登場することはほとんどありません。ただ、平岩親吉と共に信康を背後から支える立場であったことは疑いようもなく、『家忠日記』の記述からは、松平家忠たちが事件への対応を数正や親吉に相談している様子も窺えます。築山殿と信康に対する思い入れも強く、晒されていた首を急ぎ祐伝寺と若宮八幡宮に葬ったのでしよう。



石川数正墓(本宗寺／岡崎市)

問題48

正室の築山殿や長男の信康を失ってしまった家康公に献身的に尽くし、次の世継ぎとなる秀忠を出産した女性はだれでしょうか？

- (1) お万の方 (2) 小督局
(3) 西郷局 (4) 西郡局

解説

西郷局は通称「お愛の方」として親しまれています。築山・信康事件が起きた同年の天正7年(1579)4月に、二代将軍となる三男の秀忠を出産しており、精神的に苦しんでいた家康公の心の支えになったのではないかと思います。家康公は西郷局を殊の外慈しんだようで、翌年には四男の忠吉ももうけました。ただ、強度な近眼であったとも言われ、目の不自由な女性たちを哀れんで衣服や食料を与えていたとも伝わります。天正17年(1589)、家康公が秀吉に謁見をして浜松から駿府に移って間もなく、38歳の若さでこの世を去りました。墓所は宝台院(静岡市葵区)にあります。



西郷局像(宝台院蔵／静岡市葵区)

問題49

天正9年(1581)、武田氏の遠江侵攻の拠点、高天神城を攻略して奪還した際、本丸地下の石牢に「殿(家康公)が城に入られるまでは」と7年間も幽閉されていた忠臣が助けられました。この武将はだれでしょうか？

- (1) 大河内政局 (2) 小笠原貞慶
(3) 岡部元信 (4) 小栗吉忠

解説

高天神城(掛川市)は、戦国時代に徳川と武田の戦闘が何度も繰り返された城です。武田勝頼は父の信玄も落とせなかった高天神城を、天正2年(1574)6月に大軍を率いて落とします。城主の小笠原長忠は武田方に降伏しましたが、軍監の大河内政局は敵に屈しなかったため、勝頼は激怒して政局を城の石窟に幽閉してしまいました。しかし、城番が政局の義に感動して、密に世話をしたと伝わります。天正9年(1581)3月、家康公が城を奪還し、約7年間も牢に閉じ込められていた政局を助け出します。家康公に再会した時、政局は歩行困難になっていたと伝わりますが、その後、恩賞を与えられて再度家康公の元で戦い、長久手の戦いで討ち死にしました。



大河内政局幽閉の石窟
(高天神城/掛川市)

解答… (1)

問題50

天正10年(1582)、本能寺の変で信長が殺害された後、堺まで来ていた家康公一行は「伊賀越え」を敢行し岡崎まで戻ることができました。この時に金銭面や野盗たちとの交渉で家康公を援けたと伝わる京の御用商人はだれでしょうか？

- (1) 今井宗久 (2) 茶屋清延
(3) 津田宗及 (4) 山上宗二

解説

家康公の三大危機の一つが本能寺の変後の「伊賀越え」です。一般的には伊賀山中での命がけの逃避行そのものを指していますが、本当の意味での危機と考えられるのは、徳川の重臣たちのほとんどが、このメンバーに加わっていたことでしょう。野武士や野盗に襲われかねない状況の中で、家康公一行を援けたとされる人物の一人が京の呉服商・茶屋四郎次郎清延です。茶屋氏は後に御朱印船貿易で活躍をしますので、もともとから京都の商人と思われがちですが、『茶屋家由緒抜書』という史料には、若い頃から家康公のお側に仕え、中島と称して幾度も合戦に出たと記されています。もともとは三河武士ではなかったのかという論拠の一つになっています。



茶屋清延像
(情妙寺蔵・名古屋市中区)

解答… (2)

問題51

天正10年(1582)、本能寺の変の後、主のいなくなった旧武田領(甲斐、信濃、上野)を北条氏などと争った天正壬午の乱で、北条氏との有利な和睦につながる大きな戦果を挙げ、家康公から佐久・諏訪の二郡を与えられ、小諸城代となった旧武田の遺臣はだれでしょうか？

- | | |
|----------|----------|
| (1) 穴山梅雪 | (2) 真田昌幸 |
| (3) 武田信吉 | (4) 依田信蕃 |

解説

武田氏滅亡の折、最後まで武田方の田中城を守っていたのが依田信蕃です。家康公が開城を勧告しますが、勝頼の死が確かめられるまではと抵抗を続けました。開城後は家康公に出仕するよう勧められますが、それも断り、父祖の代からの居城である春日城(佐久市)に引き揚げます。その後、北条氏との戦いを経て徳川方に与するようになり、武田の遺臣たちの信頼を得て小諸城を任されるようになりました。家康公は荒れていた旧武田領の鎮撫のために重臣の大久保忠世を信州惣奉行として小諸城に派遣しますが、信蕃の協力により早期に安定を取り戻したと言えます。



依田信蕃木像
(蕃松院蔵／佐久市)

問題52

天正11年(1583年)、前問の天正壬午の乱の和睦の印と、急速に勢力を増してきた羽柴秀吉への対抗の意味もあり、家康公は娘を北条氏直に嫁がせ縁戚関係を結びます。この北条家に嫁いだ娘とはだれでしょうか？

- | | |
|---------|--------|
| (1) 朝日姫 | (2) 千姫 |
| (3) 督姫 | (4) 濃姫 |

解説

家康公には正室・側室の子を含め合計16人の子供がいましたが、内男子は11名、女子は5名でした。督姫は二女にあたり、最初の側室である西郡局との間に生まれました。天正13年(1585)、19歳で北条氏との和睦の証に北条氏直に嫁ぎますが、後の小田原の陣に際して、家康公に氏直の助命嘆願をします。翌年、氏直が死去すると家康公のもとに戻り、文禄3年(1594)、秀吉の計らいで姫路城主となった池田輝政に再嫁します。多くの子宝に恵まれますが、輝政が死去すると51歳でこの世を去りました。戦国期の武将の子女たちは、その多くが政略のために運命を翻弄されますが、督姫もその一人だったと言えます。



督姫像(東京国立博物館蔵)

問題53

勢力を拡大する秀吉に対抗するために家康公に接近し、小牧・長久手の合戦を引き起こすきっかけを作った織田信長の遺児は誰でしょう。

- (1) 織田信雄 (2) 織田信包
(3) 織田信孝 (4) 織田秀信

解説

信長死後の跡目相続を決定したのが「清洲会議」ですが、その内容は信長家臣たちの旧織田領分割に他なりません。この会議には、織田家では秀吉に担がれた幼少の三法師丸(信長の嫡男で本能寺の変に際し、二条御所で自害した織田信忠の長子)しか登場しておらず、二男の信雄や三男の信孝などは顔を出していませんでした。これ以降、発言権を増した秀吉によって織田氏は傀儡化されていきますが、不満を持った信雄は家康公に接近するようになったのです。家康公は当初は黙殺していましたが、紀州の雑賀衆・根来衆や四国の長宗我部元親、北陸の佐々成政、関東の北条氏政らと秀吉包囲網を形成し、信雄と共に秀吉に対してしたのです。



織田信雄像(総見寺蔵/名古屋市中区)

解答… (1)

問題54

天正12年(1584)、秀吉との小牧・長久手の合戦が起きました。この戦いで、主家である織田家を乗っ取ろうとする秀吉の悪逆非道を非難する文を書いた看板を多くの場所に立て、怒った秀吉に10万石の賞金までかけられた徳川四天王のひとりは何れでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

榊原康政は、徳川四天王にも数え上げられる三河武士で、16歳の三河一向一揆の初陣以来、戦場で多くの武功を挙げてきました。豪傑として名をはせる康政でしたが、学問や策略も得意としていました。小牧・長久手の戦いの際に、秀吉の悪行を非難した檄文を触れ回して、諸大名に徳川側に味方するように促しました。秀吉は怒り、康政の首に高額な恩賞を懸けたと言います。関ヶ原の戦いの際、徳川秀忠が関ヶ原の戦いに遅参したことを父親である家康公が怒り、面会すら許さなかった時、康政は家康父子の間に入って懸命に仲直りをさせました。



榊原康政所用黒糸威二枚胴具足(東京国立博物館蔵)

解答… (3)

問題55

小牧・長久手の合戦で家康公の実力を見せつけられた秀吉は、敵対関係から方向転換^{てんかん}を図ります。その際、和睦^{あか}の証しとして秀吉の養子^{ようし}に送られた家康公の二男はだれでしょうか。

- (1) 於義丸^{おぎまる} (2) 仙千代^{せんちやう}
 (3) 竹千代^{ちゆうまつ} (4) 長松丸

解説

小牧・長久手の合戦は徳川方の有利な展開で進みましたが、最後は秀吉の圧倒的な軍事力で伊賀、伊勢などの地域が攻略されてしまいました。織田信雄もこの段階で単独講和を結ばざるを得ず、家康公も戦を続ける大義を失ったのです。秀吉との和睦の条件として人質が要求されましたが、徳川家中の多くは反対でした。そんな中で秀吉と交渉を進めたのが石川数正です。数正は人質としてではなく、秀吉の養子として家康公の二男である於義丸^{おぎまる}を大坂に送るよう双方に働きかけました。その結果、和睦交渉は成立しましたが、数正は徳川家臣団の中で次第に孤立していくこととなります。



中村家住宅
秀康は浜松城外の中村家の屋敷で誕生した
(浜松市西区)

解答… (1)

問題56

天正14年(1586)、秀吉は家康公を臣下に迎えようと、築山殿亡きあと、正室のいない家康公に妹を嫁がせます。この政略の犠牲^{ぎせい}になった女性はだれでしょうか？

- (1) 朝日姫 (2) 千姫
 (3) 督姫 (4) 濃姫

解説

朝日姫の悲劇については、ドラマや映画でもよく取り上げられています。秀吉が上洛^{かいはく}をしない家康公を懐柔^{かいじゆう}するために、自らの妹を離婚^{かいはん}までさせて嫁がせたという物語です。そういう意味では悲劇のヒロインということになりますが、徳川家の女性たちについて記された史料によりますと、ちょうど同じ時期に家康公の実母「於大」が関宿城(千葉県野田市)から浜松城^{おもち}に赴いています。これは朝日姫が寂しくないようにとの家康公の計らいでしょう。そんな朝日姫でしたが、嫁いで2年後には母・大政所の見舞いに京の聚楽第に赴き、家康公のもとに帰ることなく、2年後に死去してしまいました。



朝日姫像(南明院蔵/京都市東山区)

解答… (1)

問題57

和睦から2年後の天正14年(1586)、ようやく大坂城で秀吉に謁見、臣下の礼をとった家康公ですが、その間、岡崎城に娘の見舞にきた秀吉の母の居館のまわりに薪を積み上げ、家康公万一の際は火をつけるぞと秀吉を牽制し、間接的に家康公の身を守ったと伝えられる家臣はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 石川数正
(3) 酒井忠次 (4) 本多重次

解説

この伝承話は正に「鬼の作左」の真骨頂と言えるものでしょう。自分の主君の命を守るためなら、後でどのようなお咎めがあろうとも平気でやってのける、そんな三河武士の忠義心を表した話としてドラマでも取り上げられています。実際の本多重次の姿については定かではありませんが、石川数正出奔後は岡崎城代としての重責を果たしていました。家康公の信頼も厚いものがあったのでしょう。浜松城には「作左曲輪」があり、近年特に注目されていますが、三方ヶ原の合戦時では、そこに兵糧を蓄え守るなど、縁の下の力持ちのような存在であったのかも知れません。



本多重次像
(模写/本願寺蔵/取手市)

解答… (4)

問題58

秀吉に臣下の礼をとった家康公は、居城を浜松から駿府に移して本格的に五ヶ国の経営に着手します。その代表的な政策である「五ヶ国総検地」を中心になって実施した譜代の家臣はだれでしょうか？

- (1) 伊奈忠次と小栗吉忠 (2) 鳥居元忠と平岩親吉
(3) 榊原康政と本多忠勝 (4) 本多正信と松平家忠

解説

五ヶ国の広大な領地を所有するに至った家康公は、秀吉に倣って検地を実施しました。しかし、その内容は太閤検地とは異なり、零細な農民まで名請人として土地の所有者とし、年々の収穫実態や賦役などを考慮した検地目録を作成して、年貢の収納に当たるといったものでした。農民たちの暮らしを安定させるための方法ですが、そのために活躍したのが、三河以来の譜代家臣でもある伊奈忠次(西尾市小島出身)と小栗吉忠(岡崎市筒針出身)です。彼らに各地域の在地武士などを役人として同行させたのでした。新しい時代に向けて、実務に長けた武士たちが重用されるようになってきたのです。



伊奈忠次像(水戸市)

解答… (1)

問題59

五ヶ国の経営にあたり、特に^{きんざん}金山開発などに力を^{はつき}発揮した武田の遺臣はだれでしょうか？

- (1) 穴山梅雪 (2) 大久保長安
(3) 武田信吉 (4) 依田信蕃

解説

甲斐国はもともと金山開発が盛んな国で、武田信玄の時代には甲州金が武田家を支えていたとも言われます。そんな武田家の遺臣が大久保長安ですが、父親は^{はりまのくに}播磨国(兵庫県)の猿楽師でした。その後、甲斐国に流れて信玄お抱えの猿楽師となり、息子の長安は武田信玄に召し抱えられたと伝わります。武田氏が滅ぶと金山開発の技術を買われて家康公に出仕したと伝わりますが、定かではありません。家康公のもとでは大久保忠隣^{ただちか}の与力となって姓を賜り、土屋から大久保に改姓し甲斐国の再建に尽力しました。後にその手腕が認められ、幕府行・財政の中心的な役割を果たしていくことになります。



大久保長安像(大安寺蔵/佐渡市)

問題60

天正18年(1590)、豊臣秀吉が北条氏を攻めた小田原征伐は、どのような理由で起こったのでしょうか？

- (1) 北条氏が奥州の伊達政宗と同盟を結び、豊臣政権に反旗を翻したから。
(2) 北条氏が秀吉の出した「惣無事令」に従わず、争いを続けたから。
(3) 北条氏が家康公の領地に侵攻し、家康公が秀吉に援軍を求めたから。
(4) 北条氏が奥州への進出を企て、伊達政宗から援軍の要請があったから。

解説

天正13年(1585)、自ら朝廷の最高位である関白に登り詰めて天下人としての地位を揺るぎないものにした秀吉でしたが、翌年、家康公に臣下の礼を取らせることに成功すると、いよいよ本格的な天下平定事業に乗り出します。そのための大義名分として、天皇の名で出された命令が、武力による争いを禁じた「惣無事令」でした。この命令に従わなかったのが、真田氏との争いを繰り返してきた小田原の北条氏政、氏直父子です。天正18年(1590)、秀吉は家康公を先陣とし、20万以上と言われる大軍で小田原城を囲みました。北条氏は敗北し、奥州の平定も行われたことで、秀吉による天下平定が実現したのです。



北条氏政像
(小田原城天守閣蔵/小田原市)

問題61

天正18年(1590)、家康公の関東移封で、北条氏の^{いほう}本拠地であった小田原を与えられた武将はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 大須賀忠政
(3) 鳥居元忠 (4) 本多忠勝

解説

後に、小田原4万5千石の城主となった大久保忠世は、十六神将にも数え上げられる三河武士で、弟に同じく十六神将の大久保忠佐と、三河物語の作者として知られる大久保彦左衛門^{ただすけ}がいます。三河一向一揆で、多くの武将達が一揆側についていた中、大久保一族は家康公のために一丸となって戦いました。家康公の信頼厚かった忠世は、一揆側について家臣と家康公の仲介に入って和議をもちかけ、敵に回った家臣達を帰参させました。三方ヶ原の戦いで敗戦した際、忠世は浜松城からまだ動ける兵達を率いて^{さいががけ}犀ヶ崖まで行き、武田軍に夜襲^{いっし}をしかけて、敵に一矢報いました。



大久保忠世像
(徳川十六神将図/法蔵寺蔵/岡崎市)

解答… (1)

問題62

家康公に従わない^{あわのくに}安房国の^{さとみ}里見氏をけん制するために、^{しもうさりのくに}下総国^{おおたき}大多喜に配された武将はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 大須賀忠政
(3) 鳥居元忠 (4) 本多忠勝

解説

緩やかでのどかな里山風景の中に突然現れるのが、本多忠勝が築いた大多喜城三層四階の天守閣です。もともとは安房国の里見氏が支配していましたが、家康公の関東移封に従い本多忠勝が10万石で入封しました。以後、城下町の建設も行われ、江戸時代には大多喜藩も置かれていましたが、財政難から城郭も次第に荒廃し天守閣も火災で焼失したまま再建されることはありませんでした。現在は城域が千葉県の指定史跡に登録されており、昭和50年には天守閣も再建されました。大多喜町では本多忠勝を町を挙げて顕彰しており、様々な研究会やイベントが催されています。



本多忠勝像(千葉県大多喜町)

解答… (4)

問題63

関東移封に伴い、徳川家臣団のなかで、最も多い12万石を与えられ、高崎城主となった武将はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

井伊直政が家康公の関東移封に伴って与えられた地は、当初は高崎ではなく近くの箕輪(高崎市)でした。ただ、中山道が江戸への主要な街道として整備されると、碓氷峠を越えた後は板橋まで主要な拠点が無いということもあり、現在の高崎に城を移します。以後、高崎は北関東の中心都市として栄え、

「お江戸見たけりゃ高崎田町、紺ののれんがひらひらと」

などと謳われるようになりました。関東移封に伴う家臣団の配置では、高禄で力の大きい重臣を関東の入り口—江戸に向かう主要街道の拠点に配し、旗本および小禄の重臣たちを江戸から遠くない地に配しました。



高崎城址(高崎市)

問題64

家康公側近の武将、石川数正は成長期の家康公を支えた最大の功労者ですが天正13年(1585)、なぜか家康公のもとを離れ、大坂の秀吉のもとへ身を寄せます。その後、家康公の関東移封に伴い、秀吉の命令で、ある城と城下町をつくりますが、現在、国宝ともなっているこの城は何城でしょうか？

- (1) 犬山城 (2) 熊本城
(3) 彦根城 (4) 松本城

解説

石川数正の出奔理由については現在でも謎の部分が多く、様々な憶測が飛び交っています。はっきりしているのは、数正が秀吉のもとに入ってから朝日姫の婚儀が行われ、また母親の大政所を岡崎に送るなど、家康公に対しての態度が変化したことでしょう。強硬な姿勢は影をひそめ、一転懐柔策に出るようになったのも、数正の出奔と関係がありそうです。数正は秀吉に出仕した後は和泉国10万石を与えられましたが、その後は政治の表舞台に顔を出すこともなく静かに暮らしたようです。家康公の関東移封後は信州松本に8万石を与えられ、現在の国宝天守松本城を築城しました。



松本城天守閣(松本市)

問題65

戦乱を終わらせ秩序ある社会を構築するため、教育の必要性を認識した家康公は江戸城に儒学者を呼び寄せました。その儒学者とはだれでしょうか？

- (1) 新井白石 (2) 石川丈山
(3) 藤原惺窩 (4) 渡辺崋山

解説

家康公は、関東移封後は新しい時代の武士のあり方について模索していたようです。「武道の神髄は得易すからず」(『家康公教訓録・井上正就の記録より』)という言葉に表されるように、武士が俸禄の多少で働くことを戒め、民衆に奉仕する精神を「義の精神」として教育する必要があると痛感したのでしょうか。これまでの「下克上」の時代を経て、武力の強いものが支配するという無法・非道を改めなければならないという考えに至り、その精神を儒教の教えから学ばせようと考えて、儒学者である藤原惺窩を招へいしました。



藤原惺窩像(三木市)

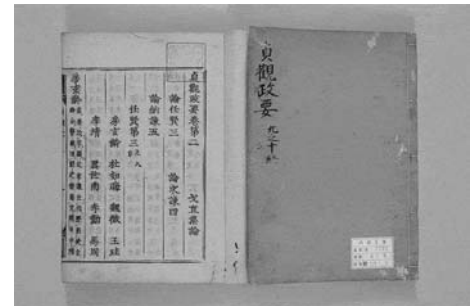
問題66

前問の儒学者が、主に講義をしたといわれる書物は何でしょうか？

- (1) 吾妻鏡 (2) 貞観政要
(3) 太平記 (4) 三河物語

解説

家康公が特に好んで読んだ本として「吾妻鑑」と「貞観政要」が挙げられます。「吾妻鑑」は鎌倉政権が成立していく過程から成立後の歴史を著したもので、家康公は山科言経に講じさせました。「貞観政要」は唐の太宗が家臣たちと対話をした内容が記されており、儒教の教えによる政治哲学が示されています。藤原惺窩は近世儒学の祖と言われる儒学者で、特に家康公に請われ「貞観政要」を講じたと言われています。そのまま侍講(直接の先生)として要請されましたが、惺窩はそれを断り、高弟の林羅山を推薦しました。



貞観政要伏見版本(国立国会図書館蔵)

問題67

家康公の三男 秀忠の傅役を務めるかたわら、江戸町奉行として江戸のまちづくりにも活躍した家臣で原宿村を中心に広い屋敷地を持ち、現在も名前が地名として残っている武将とはだれでしょうか？

- (1) 青山忠成 → 青山
 (2) 織田有楽斎長益 → 有楽町
 (3) 服部半蔵正成 → 半蔵門
 (4) ヤン・ヨーステン → 八重洲

解説

現在の東京には、三河武士たちの名前を地名で表しているところが幾つか見られます。そのうちの代表的な地名が「青山」でしょう。地名のもととなった青山忠成は、岡崎市百々町出身の三河武士です。早くから家康公に仕え、信を得て三男・秀忠の傅役となり、江戸開幕後は本多正信や内藤清成らと江戸町奉行・関東総奉行を兼任しました。また、内藤清成も現在の新宿御苑に当たる広大な土地を拝領。約100年後の元禄12年(1699)に敷地内に甲州街道「内藤新宿」が開設されました。



青山大善屋敷付近
現在の青山墓地あたり
(御江戸大絵図より)

解答… (1)

問題68

秀吉の死後、豊臣政権で五大老筆頭を務める家康公は、慶長5年(1600)、大坂城出仕を拒んだ上杉征伐に会津に出兵しますが、留守になった伏見城を反徳川の徳川の大軍が取り囲みます。このとき、伏見城を守って多くの武将たちが討ち死にしましたが、該当しない武将はだれでしょうか？

- (1) 内藤家長 (2) 鳥居元忠
 (3) 本多康重 (4) 松平家忠

解説

天下統一をかけた「関ヶ原の戦い」の前哨戦となった伏見城の攻防戦では、多くの三河武士達が家康公の盾となって戦いました。鳥居元忠は、遠征途中に伏見城に来た家康公に、一騎でも多くの家臣を連れて、これからの大切な戦いに挑むように言いました。そして自らは、石田三成の大軍に最初に狙われた伏見城で、少ない兵力で戦いました。「家忠日記」の著者・松平家忠や、弓の名手として知られた内藤家長も元忠と共に戦って討ち死にしています。壮絶な彼らの最後は、先祖の代から徳川家を支えてきた三河武士の生き様そのものでした。



伏見城守備図

解答… (3)

問題69

前問の伏見城の戦いで討ち死にした武将で、戦国時代の家康公を取り巻く状況を詳細に今に伝えてくれる貴重な日記を残したことで知られる武将はだれでしょうか？

- (1) 内藤家長 (2) 鳥居元忠
(3) 本多康重 (4) 松平家忠

解説

徳川家の一族には「十四(または十八)松平」と呼ばれる家があります。松平家忠は、その中の深溝松平家と呼ばれる、現在の幸田町に本拠地を置く武家に生まれました。十四松平家は松平(徳川)宗家とは独立した庶子家でしたが、酒井・石川・本多家などの譜代の三河武士と同様に、松平家を支えてきました。家忠の父・松平伊忠は長篠の合戦で討ち死に、家忠も伏見城攻防戦で鳥居元忠らとともに討ち死にしています。家忠は戦国を生きる家康公の動向や、当時の武士の日常生活を記した「家忠日記」の著者でもあり、大久保彦左衛門の「三河物語」と共に、現代の私達に三河武士の精神を伝えてくれる貴重な史料になっています。



松平家忠像(本光寺蔵/幸田町)

問題70

会津出兵の途中の小山評定(栃木県小山市)において、家康公への味方を真っ先に申し出て、上杉征伐に参加していた豊臣恩顧の武将たちを徳川方につかせた豊臣大名で、戦後、広島50万石の太守となったのはだれでしょうか？

- (1) 加藤清正 (2) 小早川秀秋
(3) 福島正則 (4) 山内一豊

解説

関ヶ原の合戦で東軍に属した豊臣恩顧の武将は、福島正則をはじめ、黒田長政や細川忠興、池田輝政、加藤嘉明など、その多くが合戦の武功によって成長してきた「武断派」と呼ばれる武将たちでした。対して西軍をリードしたのは石田三成や増田長盛、長束正家などの政治的な手腕を買われて成長した「吏僚派」と呼ばれる豊臣大名たちです。全ての豊臣家臣たちをこの二つで分類することには無理がありますが、家康公は武断派の家臣たちにとって頼れるリーダーだったので、小山評定では福島正則の一言で結束力が強まることになったのです。



福島正則所用具足(模造)

問題71

慶長5年(1600)、上杉征伐から引き返した東軍は、石田三成率いる西軍と関ヶ原でぶつかります。このとき、義父の井伊直政とともに先手大将として一番槍の手柄を挙げ、後に清州城主となりますが、このときの傷が原因で28歳の若さで亡くなった家康公の四男はだれでしょうか？

- (1) 徳川義直 (2) 松平忠吉
(3) 松平忠輝 (4) 結城秀康

解説

松平忠吉は家康公の四男に当たり、母親は三男・秀忠と同じ西郷局です。わずか1歳で東条松平氏の家督を継ぎ、2歳で沼津城主、13歳で元服して忍城主となりました。幼名は福松丸。その後、井伊直政の娘と結婚し、21歳の時の関ヶ原の合戦が初陣となりました。直政は自分が後見となり福島正則を抑えて東軍の先陣を切らせ、見事初陣を飾らせています。家康公はこの功から忠吉を尾張清洲52万石の大名に抜擢しました。しかし、この時の傷が原因かどうかは定かではありませんが、28歳の若さで死去、跡を継いだ弟の義直が徳川御三家筆頭としての初代尾張藩主となったのです。



松平忠吉所用銀箔置白糸威具足
(徳川美術館蔵/名古屋市)

解答… (2)

問題72

関ヶ原の合戦で西軍に属しながら家康公に内応し、東軍を勝利に導く決定的な働きをした武将は誰でしょうか？

- (1) 大谷吉継 (2) 黒田長政
(3) 小早川秀秋 (4) 島津義弘

解説

関ヶ原の勝敗は、小早川秀秋の「裏切り」によって決定したと言われます。しかし、家康公は小早川の東軍への味方を「裏切り」「寝返り」とは考えず、当初からの予定の行動「内応」と把握していました。これは戦を前にして、少しでも敵を味方につけるための事前工作として、当たり前のように行われていた戦術に他なりません。石田三成も多くの大名たちに書簡を送りつけていました。ただ、その場の状況で態度を変え、東軍についた朽木元綱や小川祐忠などは、家康公より叱責を受け減俸や改易の処分を受けています。小早川秀秋は合戦後は岡山藩55万石に加増されましたが、2年の後に21歳でこの世を去りました。



小早川秀秋像(高台寺蔵/京都市東山区)

解答… (3)

問題73

徳川本隊でもあった三男 秀忠隊は関ヶ原の合戦に間に合いませんでした。秀忠の遅参を激怒した家康公にその許しを願い、二人の間を取り持ったとされる武将はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

東山道(江戸時代からは中山道)を通り関ヶ原に向かった秀忠隊には、多くの徳川大名が従っていました。その中でも参謀として秀忠を支えていたのが、榊原康政や内藤政長、本多正信らの関東奉行たちです。特に家康公の若い頃より譜代として仕えていた榊原康政は、家康公も絶大な信頼を寄せていました。上田城の真田攻めに手間取り、翻弄された拳句に、関ヶ原本戦に遅参するという秀忠の失態に責任を負ったのは言うまでもないことでしょう。康政は怒る家康公と秀忠の仲を取り持ったと伝えられますが、徳川創業期より仕えた譜代の家臣たちの最後の心意気を感じさせる話です。



榊原康政像
(東京国立博物館蔵)

解答… (3)

問題74

最初は武田氏、のちに家康公に仕え、関ヶ原合戦では一族が東軍・西軍に分かれた真田一族のなかで、東軍に属し、戦後、上田藩主(後に松代藩主)となったのはだれでしょうか？ 妻は本多忠勝の娘・小松姫。

- (1) 真田信綱 (2) 真田信之
(3) 真田昌幸 (4) 真田幸村

解説

真田家は徳川家に敵対した一族として知られ、特に真田昌幸・幸村父子は対家康公の姿勢を貫いた戦国武将としてよく知られています。しかし、真田昌幸の長男・信之は、徳川家の人質として過ごした時期があり、妻は本多忠勝の娘の小松姫でした。信之は父や弟達とは反対に、家康公や三河武士との信頼関係を築いてゆきました。関ヶ原の戦いの際に昌幸と幸村が西軍に従っても、信之は家族と袂を分かち徳川家に忠誠を誓いました。大坂の陣では幸村が再び家康公に刃を向けて討ち死にしましたが、家康公は信之に処分を与えませんでした。信之は後に松代藩主となり、真田家は大家家として幕末まで続きました。



真田信之像
(個人蔵／江戸時代)

解答… (2)

問題75

関ヶ原の合戦後、東海道の整備に代官として活躍し、伝馬制度の確立に貢献した今川遺臣はだれでしょうか？

- (1) 大久保長安 (2) 大沢元胤
(3) 彦坂元正 (4) 松下之綱

解説

家康公は戦乱の時代に荒れたインフラの整備を積極的に進めました。特に江戸を中心に行われた街道の整備は、現在の日本の姿の原型となって残され、また復活させようとする動きまであるようです。彦坂元正はもともと今川の家臣でしたが、民政に対する実務の手腕を買われ、伊奈忠次や大久保長安らと宿場の巡検や街道の整備に力を発揮しました。特に伝馬の制度創設については中心となって活躍し、「御伝馬之定(ごてんまのさだめ)」にその名を残しています。晩年は幕府から寵免、改易の処分を受け寂しく生涯を閉じましたが、その理由は定かではありません。



「御伝馬之定」
(写し/水口歴史民俗資料館蔵)

問題76

関ヶ原の合戦後、家康公は朝廷との関係強化や京都の治安、警護を強化するため、行政・交渉能力に優れた家臣を京都所司代に任命します。約20年間にわたってその役に任じられたのはだれでしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 大久保忠隣
(3) 藤堂高虎 (4) 松平容保

解説

関ヶ原の合戦後、最初に京都所司代に任じられたのは奥平信昌ですが、これは西軍の残党狩りの目的が強く、安国寺恵瓊を捕縛すると1年で板倉勝重に代わりました。勝重は柔和な人柄と伝えられますが、朝廷と幕府の間を取り持ち、双方から大きな信頼を得て20年間にわたり、その任に当たります。勝重は幼少より僧として出家していましたが、永禄4年(1561)の善明堤の戦いで父・好重を失い、弟の定重も高天神城の戦いで失うと、家康公の命で還俗し板倉家の家督を継ぎました。以後、家康公に従い、その的確な判断力や政治力を買われて京都所司代に抜擢されたのです。



板倉勝重木像
(頭部/長圓寺蔵/西尾市)

問題77

慶長8年(1603)、江戸に幕府を開いた家康公が、豊臣氏との関係を良好に保つため、秀吉との生前の約束を守り実行したことは何でしょうか？

- (1) 大坂城の豊臣秀頼に次の将軍職を約束した。
- (2) 孫の千姫を秀頼のもとへ嫁がせた。
- (3) 朝鮮出兵を取りやめ、国交を回復した。
- (4) 秀吉の養女であった江姫を秀忠の正室に迎えた。

解説

秀忠の長女・千姫が生まれたのは慶長2年(1597)、秀吉死去(慶長3年)の前年です。秀吉は自分の死後の秀頼の行く末を案じ、家康公に千姫の輿入れを懇願したと伝わっています。家康公はその約束を守り、江戸に幕府を開いた慶長8年(1603)に、まだ7歳の幼い千姫を大坂城に嫁がせたのでした。このことは豊臣氏に対する融和策に他なりませんでしたが、その関係は次第に悪化し、慶長20年(1615)の大坂夏の陣で秀頼は自害、豊臣氏は滅んでしまいます。この時、家康公の命で大坂城から救出された千姫は、この後、姫路城主となる本多忠刻(忠勝の孫)に再嫁することになります。



千姫所用羽子板(姫路城/姫路市)

解答… (2)

問題78

慶長12年(1607)、家康公は駿府に移り「大御所政治」を行いますが、その中心となって働いた家臣はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠隣
- (2) 土井利勝
- (3) 内藤清成
- (4) 本多正純

解説

将軍職を退いた家康公が「大御所政治」で目指したものは、幕府の組織やさまざまな制度の基盤づくりでした。そのために「新参譜代衆」と呼ばれる新たな人材を積極的に登用しましたが、その中心となって活躍したのが本多正純です。正純は家康公の右腕であった本多正信の子であり、親子二代にわたって家康公のブレーンとして重要な役割を果たしました。新参譜代には他に成瀬正成、安藤直次、竹腰正信らがいましたが、彼らは尾張徳川家、紀州徳川家が立藩すると幼い藩主を支える付家老として活躍したのです。



宇都宮城

本多正純は宇都宮15万5千石の大名になるが、後に改易された(復元/宇都宮市)

解答… (4)

問題79

オランダ船リーフデ号のイギリス人航海士で、豊後で難破し大坂で処刑されるところを家康公に救われ、外交の顧問となったのはだれでしょうか？

- (1) ウィリアム・アダムス
- (2) フランシスコ・ザビエル
- (3) ヤン・ヨーステン
- (4) ルイス・フロイス

解説

慶長5年(1600)、オランダ船リーフデ号が豊後国(大分県)で遭難しました。この時に多くの乗組員は死亡しましたが、僅かな生存者も大坂で処刑されようとしていました。この時に家康公の命で助けられたのが、オランダ人航海士のヤン・ヨーステンとイギリス人航海士のウィリアム・アダムスです。この二人は後に、家康公の外交顧問として外国貿易を進める上で大いに貢献しました。アダムスは家康公に請われて旗本となり「三浦按針」と名乗ります。そして、同じく旗本の馬込勘解由(一説に三河生まれの地侍の子)の娘と結婚し日本で没しました。



ウィリアム・アダムス像
(横須賀市自然人文博物館蔵)

解答… (1)

問題80

家康公に望まれて幕政顧問役に就任した人物で、陰陽道や風水に基づく江戸の都市計画や、幕府初期の朝廷政策・宗教政策に深く関与。家康公の称号を「東照大権現」とし、後に上野 寛永寺を創建したのはだれでしょうか？

- (1) 金地院崇伝
- (2) 南光坊天海
- (3) 林 羅山
- (4) 三浦按針

解説

戦国の世を制して天下人となった家康公は、太平な世を築くために様々な取り決めを行いました。そこで、大きな力になったのが南光坊天海です。天海は僧で、その頭脳を生かして都市計画や宗教政策などの助言を家康公に行いました。家康公は天海に天台宗の拠点として、下野日光を預けます。元和2年(1616)、死期を悟った家康公は、本多正純・金地院崇伝・天海を枕元呼んで遺言し、遺体は久能山に葬り、葬礼は増上寺、位牌は大樹寺に立てることを伝え、75年の生涯を閉じました。その後、天海は家康公を徳川幕府を見守る守護神「東照大権現」として日光に祀りました。



天海像(喜多院/川越市)

解答… (2)

問題81

大御所政治の中で特に寺社行政たずさに携わり、キリスト教の禁教令や武家諸法度しよはつとなどの起草きぞうにも携わったとされる人物はだれでしょうか？

- (1) 金地院崇伝 (2) 南光坊天海
(3) 林 羅山 (4) 三浦按針

解説

大御所政治では多くの専門家を家康公のブレーンとして組織しました。現在の内閣にも似た形の原型とも言えそうですが、その中で特に寺社行政、宗教行政などを主導したのが京都南禅寺の学僧・金地院崇伝こんちんいんすうでんです。崇伝は慶長13年(1608)より家康公からの招へいを受け駿府で活躍をします。特に寺社行政については、京都所司代であった板倉勝重の協力のもと「寺院諸法度」を起草しました。また、キリシタン大名・有馬晴信と同じくキリシタンであった目付役・岡本大八しゅうわいの収賄事件が発覚し、それをきっかけに「キリスト教禁教令」を起草します。幕府の重要な政策を担ったため、「黒衣の宰相」とも呼ばれました。



崇伝像(南禅寺金地院/京都市左京区)

問題82

元々は三河武士といわれ、家康公の呉服商人から京の豪商ごうしょうともなった人物の息子で、御朱印船貿易を進め、広く海外との交易こうえきを図ろうとした家康公に、外交通商のブレーン(頭脳、相談役)として仕えたのはだれでしょうか？

- (1) 有馬晴信ありまはるのぶ (2) 岩崎弥太郎や たろう
(3) 茶屋清次ちや や きよつぐ (4) 山田長政

解説

初代茶屋四郎次郎清延は「伊賀越え」で家康公を援けましたが、慶長元年(1596)に天下人家康の姿を見ることなく京都で亡くなりました。長男で二代目の清忠はその跡を継ぎ、関ヶ原の合戦時などで父と同様、徳川のために奔走ほんそうしますが、慶長8年(1603)に急逝してしまいます。幕府の命で急ぎその跡を継いだのが清延二男の清次です。清次も家康公に重用され、特に御朱印船貿易の特権を得て、幕府の東南アジア交易を推進しました。駿府の大御所時代には家康公に多くの進言を行い、海外貿易拡大の主導者として活躍します。家康公が田中城で食べた「鯛の天ぷら」を勧めたのが、この清次です。



田中城本丸御殿(藤枝市)

問題83

前問と同じく家康公の外交通商のブレーンの一人で、琵琶湖や富士川、天竜川等の水路を開削し、「水運の父」とも呼ばれたのはだれでしょうか？

- (1) 伊奈忠次 (2) 大友宗麟
(3) 九鬼守隆 (4) 角倉了以

解説

角倉家は茶屋家、後藤家と並んで京都の三長者として有名です。角倉了以は家康公が慶長9年(1604)に始めた御朱印船貿易で、安南国(ベトナム)と交易を行い多くの財を得ました。了以はその財を投じて京都の大堰川(桂川)と高瀬川の開削事業を行い、流通事業の拡大に努めます。また、幕府の命令で天竜川や富士川などの開削事業も手がけました。角倉了以というと京の貿易家というよりも開削事業家としての印象が強い所以です。やはり大御所政治のブレーンとして活躍し、家康公は了以に駿府城と清水港を結ぶ水路の開削を命じたと記録されています(「武徳編年集成」)。



角倉了以像(千光寺/京都市西京区)

解答… (4)

問題84

江戸幕府の金座主宰者として小判の鑄造を行い、家康公の財政、貿易顧問として活躍したのはだれでしょうか？

- (1) 後藤庄三郎 (2) 大黒常是
(3) 茶屋清延 (4) 本阿弥光悦

解説

家康公の行った最も重要な事業の一つに「国産通貨の流通」が挙げられます。室町時代から戦国末期まで、国内で流通していた通貨は永楽通宝など中国からのものでした。貨幣の量は一定せず、商業発達の阻害要因の一つだったと言えますが、家康公は金銀銅を使用した国産通貨を鑄造し、安定した経済を確立しようと考えたのです。そのために盛んに金山や銀山、銅山の開発が行われ、同時に金座や銀座を創設して、小判や丁銀などの貨幣を造りました。その金座の主宰者が京都の豪商・後藤庄三郎、銀座は大黒常是(別称・湯浅作兵衛)でした。



慶長小判・丁銀・寛永通宝

解答… (1)

問題85

幕府を経済面で支えたもののひとつが^{きんざん}金山です。家康公が^{あべがわ}安倍川上流の金山を視察した際、立ち寄った^{ちやみせ}茶店の主人が「^{きんこなもち}金粉餅でございます」と、^さ黄な粉を^さ砂金に見立てて出したことを喜び、その餅に家康公が名前を付けたと伝わります。なんとつけたのでしょうか？

- (1) 安倍川もち (2) ^{こがね}黄金もち
(3) 砂金もち (4) 天下もち

解説

安倍川もちの由来は問題文に記されているように家康公が命名したというもののや、もっと古くからこの地域に存在したという言い伝えも残されているようです。安倍川の上流、甲斐国に接する地域には梅ヶ島金山(静岡市葵区)を始め、いくつかの金山が点在していました。さらに、安倍川上流と地域を接する大井川上流にも井川金山(静岡市葵区)があります。これらの金山を総称して「安倍金山」と呼んでいました。家康公の大御所時代には、金の採掘量も大幅に増加し、駿府の金座に運ばれ小判として鑄造されたのです。名物安倍川もちにも深い歴史的な背景がありますね。



安倍川上流梅ヶ島金山坑跡
(静岡市葵区)

問題86

慶長12年(1607)、家康公の九男 義直が尾張藩主になると、その^{つけ}付家老として尾張国の政治を主導し、犬山城12万3千石を与えられたのはだれでしょうか？

- (1) ^{しげむね}板倉重宗 (2) ^{たけこし}竹腰正信
(3) 成瀬正成 (4) 平岩親吉

解説

初代尾張藩主は家康公の九男・徳川義直です。義直は慶長5年(1600)の生まれですから、尾張藩主となったのは僅かに8歳の時でした。家康公は義直を3歳で甲府25万石藩主としますが、その時以来その後見役として平岩親吉に政治の執行を任せていました。これは親吉が甲府城代としてその地域を治めて来たことに因りますが、家康公の信任が厚かったことも大きな理由の一つでしょう。義直が尾張藩主となった慶長12年(1607)、親吉がその付家老となったのも当然の成り行きです。以来、慶長16年(1611)に名古屋城で亡くなるまで、義直不在の尾張藩は親吉による執政が行われました。義直が実際に尾張名古屋城に移るのは、元和2年(1616)のこと。親吉の後、付家老には成瀬正成が任じられました。



犬山城天守閣(犬山市)

問題87

大御所 家康公の側近^{そっきん}として駿府で仕えていたが、慶長15年(1610)、家康公により十男^{よりのぶ} 頼宣(紀伊藩主)の付家老^{たなべ}に任じられ、紀州田辺城主となったのはだれでしょうか？

- (1) 安藤直次^{なおつぐ} (2) 永井直勝
(3) 中山信吉 (4) 本多正純^{まさずみ}

解説

家康公の十男・徳川頼宣は慶長7年(1602)に生まれました。家康公は殊の外この頼宣を可愛がったようで、翌年には僅か2歳で水戸藩20万石を与えられます。安藤直次は幼少より家康公に仕えた生粋^{きっすい}の三河武士で、家康公の信も厚く、本多正純や成瀬正成らと共に「新参譜代」として幕政に参加していました。慶長11年(1606)、頼宣が駿河50万石に転封されると、4年後にまだ幼い頼宣を後見するために、直次が付家老に任じられます。その後、家康公が亡くなった翌年に頼宣は紀州藩55万石に転封、直次も付家老として共に紀州に移り田辺城を与えられました。



田辺城水門跡(田辺市)

解答… (1)

問題88

海外の国々と平和的な交易を目ざしていた家康公。久能山東照宮(静岡市)には、房総半島沖でのスペイン船救助のお礼として、慶長16年(1611)にスペイン国王フェリペ3世から家康公に贈られた「あるもの」が、当時の部品そのままに残されています。現在、国の重要文化財に指定されている「あるもの」とは何でしょうか？

- (1) 騎士の鎧 (2) 眼鏡
(3) 洋時計 (4) ラジオ

解説

スペイン国王に仕えた時計師、ハンス・デ・エバロが1581年に製作した洋時計です。家康公は海を越えてやってきた、光り輝くこの時計を大層お気に召され、部屋に飾っていたと伝わっています。家康公が薨去の後、直ちに久能山東照宮が造営され、洋時計は久能山東照宮に神宝として納められました。納められた洋時計は作動されること無く、時を超えて眠り続けました。当然、部品交換も行われません。このことは現代に至り「16世紀に作られた時計がオリジナルのまま現存する」という奇跡に繋がりました。(久能山東照宮HPより抜粋)



スペイン国王より贈られた洋時計(久能山東照宮史料館蔵)

解答… (3)

問題89

大坂城の秀頼と家康公の間に入り、両家の融和を
図ろうとしたものの、城内の反徳川派に家康公と
の内通を疑われ、慶長19年(1614)、大坂城を退去。
大坂の陣では徳川方として戦った豊臣家の重臣
だった人物はだれでしょうか？

- (1) 片桐且元 (2) 後藤基次
(3) 長宗我部盛親 (4) 毛利勝永

解説

大坂の陣が始まった直接の原因として、
「方広寺鐘銘事件」があります。「国家安康」
という一節が家康公を貶めるものとして金地院崇伝
により難癖をつけられ、その釈明に駿府に向かった
秀頼の重臣・片桐且元は家康公への謁見すら許され
なかったというものです。しかし、実際は、且元は
崇伝から大坂城に集結している不穏な浪人たちにつ
いて問い糺されたのでした。
徳川との衝突を避けたい且元
は秀頼を説得しようと試みま
すが、大野治長らの主戦派に
逆に徳川との内通を疑われ、
やむなく城を退去します。豊
臣と徳川の間に立ち、大戦を
避けるために体を張って頑
張った武士もいたのです。



片桐且元像
(大徳寺王林院蔵／京都市北区)

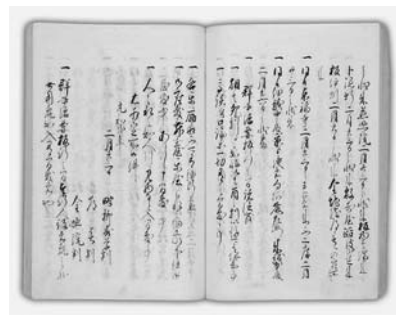
問題90

家康公の大御所時代の記録を書き留めたとされる
「本光国師日記」の著者はだれでしょうか？

- (1) 烏丸光広 (2) 金地院崇伝
(3) 南光坊天海 (4) 藤原惺窩

解説

本光国師というのは金地院崇伝のことで、
崇伝が書き留めた日記が「本光国師日記」で
す。国師というのは天皇に仏法を講ずる立場の高僧
であり、「国家の師」を表しています。崇伝は慶長15
年(1610)から寛永10年(1633)までの24年間に亘り、
幕府行政の内容、書簡などを記録しました。特に大
御所時代の家康公が行ったさまざまな政策を始め、
宗教統制に関わる記録、朝廷との関係を表した記録
など、当時の状況を調べる上で大変貴重な史料と
なっています。原本は京都南禅寺の金地院にありま
すが、出版物として図書館などにも
ありますので、一
度原典に触れてみ
るのも興味深いと
思います。



「本光国師日記」原本写し
(国立公文書館蔵／アドマック出版提供)

問題91

家康公の遺言からは、平和社会^{けんじ}を堅持するための並々ならぬ決意がうかがえますが、その一文の○
○にあたる部分はどうのような言葉が入るでしょうか？

「天下は○○の天下^{あら}に非ず、天下は天下の天下なり。」

- (1) 徳川 (2) 一人
(3) 武士 (4) 我等^{ひとり われら}

解説

「天下は一人の天下に非ず、天下は天下の天下なり」この一節は中国に伝わる兵法書^{りくとう}「六韜」の中に出てくる言葉で、家康公と林羅山との会話の中で「天下は誰のものか」という問いに、羅山が引用して答えたと伝わります(『家康公教訓録』清水橋村編著)。家康公は自分の死期が迫ったころ、駿府城に見舞いに駆け付けた外様大名たちに、この一節を使って遺言を残しました。その様子が『東照宮実記附録16』に記されています。平和社会の堅持に対する家康公の強い決意の表れと考えるとよいでしょう。



家康公遺言碑(岡崎公園)

問題92

家康公の浜松、駿府時代の側室 西郷の局の菩提寺^{ぼだい}である駿府の宝台院^{ほうだいいん}の名称は、次のうちだれの母親にちなむものでしょうか？

- (1) 長男 信康 (2) 二男 秀康
(3) 三男 秀忠 (4) 六男 忠輝

解説

三男・秀忠、四男・忠吉の実母であった「西郷局」は天正17年(1589)、38歳という若さでこの世を去りました。遺体は駿府の龍泉寺に葬られましたが、生前の功德で、特に目の不自由な女性たちが、その門前で冥福を祈り続けたと伝わります。その後の寛永5年(1628)、将軍・秀忠によって大法要が営まれ、法名も「宝台院殿一品大夫人」と改められたことから、寺名も「宝台院龍泉寺」と改められました。「徳川幕府家譜」の首巻に収められた「柳営婦女伝系」によれば、通称を「お愛」ではなく、「御平名お桐の方」と記されています。



西郷局の墓(宝台院/静岡市葵区)

問題93

江戸幕府の成立後、幕府の中樞^{ちゆうすう}となって家康公を支えたのは、どのような人たちだったでしょうか？

- (1) 本多忠勝など四天王を中心とした武功派の武士たち
- (2) 本多正信を中心とした、吏僚派^{りりょうは}の武士たち
- (3) 大名となった家康公の子や松平一門衆
- (4) 加賀の前田^{まへつ}、陸奥^{りくお}の伊達など家康公に味方した大大名たち

解説

家康公は江戸開幕前後から持続可能な平和社会の仕組みを模索していました。街道整備や宿場・伝馬制度の創設などです。しかし、最も変わらなければならなかったのが「武士のあり方」でした。それまでの中世的な「御恩と奉公」の形が、下克上の風潮で「手柄を立てる」ことにのみ価値を見出す武士の姿に変質していました。新しい時代では民に善政を施す、非道を成敗するといった道徳観を持つことを行政官としての武士に求めたのです。古い武功派の武士たちが次第に表舞台から姿を消していく中で、実務に長けた吏僚派の武士たちが中心となって活躍するようになっていったのです。



本多正信像
(藩老本多蔵品館蔵／金沢市)

問題94

徳川家の祖といわれる新田氏の一族 世良田有親^{せらたありちか}、親氏^{ちかうじ} (松平初代) 父子が、関東から乱を逃れ信州の武家を訪ねた折り、雪の山中で兎を捕らえ、正月に兎汁を馳走した縁から松平家に仕えたといわれ、幕末^{ぼくまつ}の戊申戦争^{てつしんせん}では、明治政府から唯一家^{ただ}のみ改易^{かい}されるほど徹底抗戦^{てつていこうせん}し、最後まで徳川家に忠誠^{ちゅうせい}を尽くした大名家は上総請西藩^{うさぎ}。さて、この家は何かでしょうか？

- (1) 青山家
- (2) 植村家
- (3) 大久保家
- (4) 林家

解説

三河林氏は問題文にあるように、もともとは信州小県の地侍^{ちしかた}だったと伝えられますが、流浪する世良田有親・親氏親子に兎汁^{うさぎじる}を振舞った縁で、松平初代・親氏の時代から仕えるようになった譜代家臣です。徳川將軍家ではこの時以来、正月年賀の席で兎汁を食すようになりました。この伝承をもとに岡崎城の龍城神社では、氏子さんたちの計らいで、大晦日の夜から参拝客に八丁味噌仕立ての兎汁を振舞っています。



新年を迎えて兎汁の振舞い
(龍城神社／岡崎市)

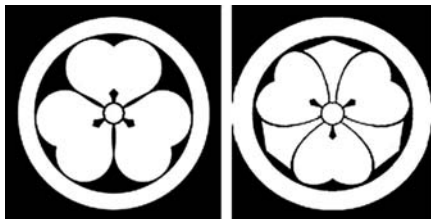
問題95

松平家の初代 親ひろちか氏の子、広親が先祖とされ、家臣団の中で最も古参こさんで筆頭ひつとうにおかれた、酢漿草かたばみの家紋とする武家はどこでしょうか？

- (1) 阿部家 (2) 石川家
(3) 酒井家 (4) 本多家

解説

酒井広親の出自については諸説があり確定したものではありません。初代・親氏ひろちかが幡豆郡坂井郷の住人の娘に産ませた子であるという説、親氏の妻の妹(姉)が岡崎市の岩津地域に所領を有していた豪族・酒井氏に嫁いで産んだ子であるという説などです(「松平由緒書」)。親氏の来歴に謎の部分が多いためですが、いずれにしろ酒井氏は松平氏初期から仕える古参の譜代家臣であるということは間違いありません。酒井氏は後に忠次さえもんの左衛門尉系と正親の雅楽助系うたのすけに分かれます。雅楽助(後に雅楽頭)系は前橋藩から姫路藩に移りますが、家紋は酢漿かたばみに剣をあしらった「剣酢漿」です。



酢漿紋(左衛門尉系)と剣酢漿紋(雅楽頭系)

問題96

幼少時より家康公に仕え、三男 秀忠ひでゆきが生まれると7歳にして側近となり、慶長15年(1610)には秀忠付きの老中、家光の代には大老として徳川三代しもうさを支え、幕府の基礎固めに尽くした、下総古河藩主はだれでしょうか？

- (1) 青山忠俊 (2) 井伊直孝
(3) 酒井忠世 (4) 土井利勝

解説

土井利勝は刈谷城主・水野信元の子であるとされていますが、これも様々な説があり、家康公の隠し子ではないかという説もあります。いずれにしろ幼少のころより家康公の側に仕え、秀忠が誕生したときには僅か7歳で傅役もりやくとなりました。その後は秀忠の成長に伴って利勝の立場も重くなり、江戸開幕直前には下総しもうさ國小見川藩主、1万石の大名となります。その後は幕府の重要な政策に関わり、対朝鮮との国交問題や国内の宗教問題などの解決らつわんに辣腕を振いながら秀忠付の老中となり、三代・家光の代まで幕政の中枢を担い続けます。篤実な人柄ごんで権謀術策ほんしゅうじゅくを用いず、将軍からも部下からも厚く信頼される人物だったと伝えられています。



土井利勝像
(正定寺・古河市)

問題97

家康公を支えた側室そくしつのなかでも聡明そうめいで外交、交渉能力すくに優れ、大坂冬の陣では和議の使者を務め、また、家康公の孫の和子が後水尾天皇に嫁いだ際や出産時には母代わりとして上洛じょうらくし、天皇より従一位を授かった武田遺臣の娘はだれでしょうか？

- (1) 阿茶あ ちゃの局つぼね(須和の方) (2) お梶かじの方
 (3) お茶阿あ ちゃ ちや ちや(お久の方) (4) 西郷の局(お愛の方)

解説

家康公には16人の側室がいましたが、正室に恵まれなかったからか、家康公にとって心の支えになるような側室たちも多くいたと考えられます。西郷の局などはその代表的な存在だったでしょう。しかし、残念なことに38歳という若さでこの世を去ってしまいました。その後を継いで秀忠・忠吉の二人の子を養育したのが阿茶の局です。したがって秀忠にとっては自分の母親のような存在だったと言えます。阿茶の局自身は子に恵まれませんでした。家康公の日々の相談相手として表向きのことも任せるようになりました。秀忠の五女・和子じゅだいが入内した時も、母代りになって上洛したのは、そんな背景があったからでしょう。



阿茶の局の墓
(雲光院／東京都江東区)

問題98

浜松城は「出世城」とも呼ばれ、多くの藩主が幕府の要職つに就きましたが、老中となって「天保の改革」を断行した譜代家臣の子孫はだれでしょうか？

- (1) 阿部正弘な おすけ (2) 安藤直正ただくに
 (3) 井伊直弼 (4) 水野忠邦

解説

浜松藩は慶長6年(1601)に桜井松平氏が藩主となり立藩しました。その後、明治を迎えるまでに22名の藩主が目まぐるしく入れ替わっています。浜松は言うまでもなく家康公が拠点を置き、武田氏との攻防を繰り返しながら戦国大名として大きく飛躍を遂げた地でもあります。東海道の重要な拠点でもあったことから、譜代の大名が藩主を務めました。家康公の飛躍ひょっかくも含めて、藩主を退いた後に幕閣に入る大名も多く、「出世城」という別称で親しまれています。老中として天保の改革を断行した水野忠邦もこの浜松城主でした。



浜松城復元天守閣
戦国大名として飛躍を遂げた出世城(浜松市)

問題99

関白 秀吉が、毛利、宇喜多などの諸大名を集め、「皆が大切に思っている宝は何か」と聞いたとき、家康公は何が宝だと答えたのでしょうか？

- (1) 備前長船の名刀
- (2) 古来「大名物」として名高い初花の茶入れ
- (3) 守り本尊の阿弥陀如来立像
- (4) 私のためには命を惜しまない500騎ほどの家臣

解説

「東照宮実記」の中の家康公と家臣の関係を表す有名な話です。「家臣こそが宝だ」と言って憚らなかつたほど、家康公と家臣たちの関係は深く緊密なものでした。「犬のように忠実な」という形容で三河武士を表している書籍を目にすることがあります。本当にそうだったのでしょか。家康公の家臣たちは、盲目的に主に尻尾を振っていたわけではありませんでした。時には議論を戦わせ、時には家康公を諫め、共に乱世の時代を生き抜き駆け上った仲間だったのでしょ。家康公は晩年に残した書簡の中で、「耳に痛いことをきちんと進言する家臣ほど大切にすべきである」と述べています。家康公と家臣たちの関係をよく表した言葉ですね。



久能山東照宮の石灯籠
多くの家臣たちが家康公のもとに集まっている(静岡市)

問題100

最終問です。家康公の偉業に向かって99の設問に向かい合い、辿り着いたのは、265年に及ぶ平和社会の実現。世界からも、パクス・トクガワーナ(徳川の平和)と評価されています。明治維新から27年で日清戦争、37年で日露戦争、74年で太平洋戦争に突入した明治以降の日本。敗戦により戦争放棄し、家康公の元和偃武以来、再度、平和国家を目指した日本は、今、終戦後何年になるのでしょうか？

- (1) 69年
- (2) 147年
- (3) 265年
- (4) 400年

解説

戦後69年を迎えた今年、世界の情勢は一段と不穏な方向へ向かっています。日本もそんな世界の状況の中で様々な選択を迫られることが増えてきました。来年は戦後70年目と家康公400年忌の節目を同時に迎えます。互いに共通するキーワードは「平和社会」。家康公の生き方から何を学ぶのか、真に私たちに問われる年を迎えます。



伊賀八幡宮の蓮
家康公の望んだ浄土の世界か(岡崎市)